

東方エボリューション

プロトタイプ・ゼロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あらすじ前の先に注意点!!

この作品はパソコンで投稿していたハーメルン作品「東方エボリューション」改正版となっております。パクリじゃないです。これ書いてた本人です。ではどうぞ。基本前作東方エボリューションと同じですが、多少の変更点がございます。

かつて地球にパンドラボックスとともにやってきた地球外生命体エボルト。彼は仮面ライダービルドとの最終決戦で完全消滅したはずだった。だが、彼は蘇った。人も妖怪も暮らす幻想の世界で。

この世界で彼はいったい何をするのか、それは神のみが知る事なのかもしれない。

コブラ！ コブラ！ エボルコブラ！ フツハツハツハツハツハツハ！

目次

第一章・星狩り幻想郷

第一話「幻想の世界」 | 1

第二話「赤い悪魔」 | 11

第三話「博麗の巫女」 | 17

第四話「隙間の大妖怪」 | 29

第五話「博麗神社」 | 35

第六話「宇宙の帝王と始まりの戦士」 | 42

第七話「現れし絶望を与える悪魔」 | 51

第八話「妖怪の賢者」 | 59

第二章・地底妖怪と紅き弓兵

第一話「世界の破壊者」 | 64

第二話「地霊殿と古明地姉妹」 | 67

第三話「懐かれる」 | 72

第四話「零夜を知る鬼」 | 83

第五話「最強の鬼と新撰組の天才剣士」 | 90

第六話「襲撃者」 | 99

第七話「怒りのままに」 | 108

第三章・解き放たれた異変の脅威

第一話「動き出す蒼き怪盗」 | 115

第二話「亡き王女が愛する人」 | 122

第三話「Absolute・Builder」 | 131

第四話「とりあえず現状報告」 | 137

第四章・幻想郷と龍神

第一話「零夜正体／謎の少女」 | 143

第二話 「黒き禁忌の力」

第三話 「久しぶりの地上と紫の心」

第一章・星狩り幻想郷

第一話「幻想の世界」

仮面ライダーエボル。

特撮ヒーローアニメ『仮面ライダービルド』に登場する地球外生命体であり、スカイウォールが出来る前に火星を滅ぼしてやってきた人物だ。地球では石動惣一に憑依して仮面ライダーである桐生戦兔たちを利用していた。

ブラッド族の王族であり、名はエボルト。火星の次に地球までも滅ぼそうとしたエボルトだが、ビルドとの最終決戦にて「仮面ライダービルド・ラビットドラゴントライアルフォーム」の前に敗れた。

ビルドに敗れ完全に消滅したはずのエボルトは、妖怪たちの最後の楽園にて復活する。

くく幻想郷くく

ビルドに負け消滅したはずのエボルトは、自分が固い地面の上で横になっっていることに異常を感じた。

目を開けて体を起こし周りをきよきよろとする。目の前には薄く霧に包まれた湖がある。

「んあ？ どこだここはア？ 俺ア確かにあの時に消滅したはずなんだが」

自分がいまだに生きていることに不思議に思った彼は立ち上がって背を伸ばし、自分の体を確認する。

「んん？ なんだこの体は？ この世界の誰かのかア？」

かつてエボルトは、自らが滅ぼした火星に訪れた宇宙飛行士である石動惣一に憑依していた。だが、いま彼が憑依しているのは16歳くらいの少年だった。

目元まで伸びている黒髪、血のように赤くなった瞳、意外と整った顔つき、中途半端に鍛えあがった肉体。記憶を探ってみれば、自分が憑依している少年は、神崎零夜というらしく、人里と呼ばれる場所で暮らす普通の人間らしい。人里の人間には珍しい能力持ちではあるが。

(まあ、しばらくこの体を使わせてもらおうとするか)

そう言っただけニヤリと笑ったエボルトは、湖の奥に見える深紅の屋敷を見てそこを目指した。

なぜそこを目指すのか、その理由は彼の近くにあった荷物にあった。

エボルトが起きたときにあったカバンには、紅魔館の皆様へと書かれた封書といくつものティーカップがあり、湖の奥にある深紅の屋敷が紅魔館であるとエボルトは直感した。

「さて。取り敢えずはコイツの記憶通り、この荷物を届けてやるとするか」

〃〃紅魔館前〃〃

何とか紅魔館に到着した（道中氷妖精に勘違いで攻撃されたが）エボルトは、門の前で立ったまま熟睡している女性を見て驚愕した。

中国の拳法家のような緑色の服を着て赤い髪を後ろで三つ編みにしている女性——神崎零夜としての記憶からこの人物が紅魔館の門番紅美鈴であり、良く門の前で居眠りしているのは知っていた。だが、記憶にあるのを見ただけと実際に見るのでは違いが大きくあった。

とにかく、エボルトが紅魔館に来て美鈴を見た第一の感想が、

（こいつ、門の前でこんなにも堂々と寝て門番として大丈夫か？

特にここのセキユリテイ）

だった。

どうしようかと考え、取り敢えず声でも掛けるかと考えた彼は、いきなりグサリという音とともに美鈴の頭にナイフが刺さったの見てまた驚いた。その後、いつの間にか美鈴の隣に銀髪の少女が現れた。ちなみにナイフを頭にぶつ刺された美鈴は頭から血を吹き出して倒れている。逆に心配になってくる。

「ごめんなさいね。美鈴には今日あなたが来ることは伝えてあったのだけど、いつも通り寝てたみたいね」

「ア？ ああ、大丈夫だ。(いつも寝てんのかこいつ?)」

いきなり話しかけられてとっさに言葉を返すエボルト。

(こいつア確かこの屋敷でメイド長として働く女だったよな。名前は確か十六夜咲夜だったか？ 時間を操る力を持つていたはず。別の世界に住む仮面ライダークロノスと同じ能力と考えていいのか)

「それで、前に頼んだものは持つてきてくれた？」

「あーこれだな？」

そう言ってカバンからティーカップの入った少し大きめの袋を取り出す。ついでに封書も。

「そうそれよ。前にお嬢様と妹様が喧嘩してティーカップを壊してしまつてね、助かつたわ」

そう言つて受け取つた咲夜は代金の入つた袋をエボルトに渡す。

咲夜の言う「お嬢様」と「妹様」とは恐らく紅魔館の主「レミリア・スカーレット」と悪魔の妹「フランドール・スカーレット」の事だろうと、零夜の記憶を覗いて得た知識でそう確信した。

本来零夜のやるべき仕事をこなして紅魔館に用がなくなつたエボルトは、何気に興味のあつた神崎零夜の住む人里に向かう。

くく人里前くく

「なんだアありや」

紅魔館から歩いて人里に来たエボルトは、大量の妖怪たちが人里を襲撃しているのを見た。

人里の前では体から炎を出し白髪の少女と、妖怪に対して素手で戦っている青いメッシュの入った女性がいた。あの二人がかなりの強者であるのは記憶からわかっていたが、それでも妖怪の数が多すぎて人里を守り切れていなかった。

「はあ???めんどつちイが仕方ねえか」

彼は懐からエボルドライバーを取り出し腰に装着する。その後、コブラエボルボトルとライダーエボルボトルをドライバーのスロットに差し込む。

本来ならここで『エボルドライバー』と音声の流れ、ドライバーに刺したボトルの名前が出てくるのだが……

エボルドライバーはうんともすんとも言わなかった。

「はあ!?

なんでだよ!?

なんで起動しねえ!?

何をしてもしも起動しないドライバに腹を立てたエボルトだが、仕方なくどこからともなくトランススチームガンを取り出すと、コブラフルボトルをセットする。

『コブラ!』

「蒸血」

『ミストマッチ……!』

コ・コツ・コブラ……! コブラ……!』

ファイヤー!』

トランススチームガンから出る紫色の煙(ネブユラガス)をエボルトの周囲に振り撒くと、ネブユラガスは彼の体を覆い、その姿を変える。

「ふう……この姿になるのも久々だなア」

血を浴びた鎧のような見た目をしているブラッドスタークとなったエボルトは人里に群がる妖怪の群れに突っ込んでいった。

次回に続く

第二話 「赤い悪魔」

くく妹紅くく

私の名は藤原妹紅。

今ではかなり有名話になっている「竹取物語」に登場する藤原家の娘であり、輝夜を憎むあまり不老不死の力を得ることが出来る「蓬莱の薬」を飲んだ者だ。おかげで一生死ぬ事も老いる事もできない体になっちまったけどな。

最近では、よく人里に来ることが多くて慧音が教鞭をやっている寺子屋で歴史の授業を教えている。と言っても、私の授業も慧音の授業もつまらないことこの上ないから誰も聞いてないんだけどさ。

それで、授業を終えた私たちはいつものように上白沢慧音と一緒に団子を食べていたのだけど、なんでタイミング悪く妖怪の群れが出てくんのかなあ。

まだ慧音の団子が20本残ってたのに。あ、言っとくけど、冥界に住むピンクの悪魔は慧音の10倍は食べるぞ。

?????ま、まあ、そんなことは置いといて、だ。(あー思い出しただけでも頭痛い)

「この数何なの？」

軽く数百は超える妖怪の大群がいる。基本妖怪っていうのは群れるのを好まずに単体でいるのが多いんだが、種族の違う妖怪たちがこんなにも群れたのは初めて見たよ。

そんなことを考えいるとき、私の隣にボロボロになった慧音がやってくる。

「慧音、大丈夫そうか？」

慧音は逃げ遅れた子供や住民たちを逃がすときに何度か妖怪たちの攻撃を受けていたからか、服のあちこちが焦げていたりボロツとなっていたりした。

「あ、ああ。なんとかな。一応霊夢には紫を通じて伝えてはあるが、霊夢が来るまでどこまで持ちこたえられるかわからん」

慧音は誰が見てもやせ我慢しているように見える感じだ。くそ、頼む。早く来てくれ。このままじゃ、何度でも蘇る私はともかく慧音の体がもたない。今日は満月じゃないから慧音も全力を出せないし。

誰か????
っ！

『おお、おお。 やってるねえ』

突然何者かの声が聞こえたと思った瞬間、何やら見慣れない血に濡れたような鎧に身を包んだ奴がいきなり私たちの目の前に現れて右足で妖怪たちをまとめて吹き飛ばした。何言っているのかわかんないと思うけど、私自身がわかんないんだ。説明なんか無理！

奴は吹き飛んでいった妖怪たちのほうを見ると盛大に溜息を吐く。

『全く???こいつの記憶では妖怪ってのは恐ろしいってあったらどんなものかと思えば、この程度とは。心底がっかりだ。まだ俺に立ち向かったやつらのほうがよっぽど強かったぞ』

ぶつぶつとそう独り言を吐いていた奴はいきなり私たちの方を向く。その動作に私たちは身構えるが、奴は『そう警戒すんなよお』と言って腕を組む。

「お前が何者かわからないのに警戒するなっていうのは無理があるぞ」

慧音はそう言ってより一層警戒の域を高める。奴は『それもそうか』と笑った。

『初めまして、だなア、お二人さん。俺の名はブラッドスターク。覚えておいてくれよ?』

そう言って奴は???スタークは後ろから襲ってきた妖怪を裏拳で仕留める。

「私たちが助けた目的はなんだ?」

慧音の次に私が問う。私の中ではこれが一番気になっていた。

『目的イ？ んなもんねえよ。それにお前らを助けるつもりなんざ毛頭ねえ。そうだな、強いて言うのであれば、この世界における勢力がどれほどのものかを確かめる為って言うっておこう』

なんとなくだが、奴の目的はそれだけじゃない気がした。だけど、こいつにはスキマ妖怪と同じ飄々とした感じがする。そう簡単には答えてくれないだろう。

『さて、ここいらの勢力がどんなものかある程度は分かったし、俺はこの辺で????』

霊符「夢想封印」

エボルの話を遮るような感じで、スタークの後ろからいくつもの色とりどりの弾幕が飛んでくる。スタークは溜め息を吐くと、手に持っていた赤い銃で夢想封印を撃ち抜いていく。

スタークの放った弾幕みたいなやつが夢想封印とぶつかって辺り一面に爆発した煙が立ち込める。

煙はすぐに晴れ、見てみれば赤と白の巫女装束に身を包んだ幻想郷の素敵な楽園の巫女??? 激怒した表情で博麗霊夢がいた。

次回に続く

第三話 「博麗の巫女」

博麗霊夢……確か、博麗神社に住む妖怪退治の専門家で異変解決を主としている幻想郷の巫女だったか？毎日お金のない生活をしているという、ある意味で俺でさえも同情するような毎日を送っている可哀な奴だ。まあ、コイツの記憶から知ったんだがな。

『いきなり弾幕を打ってくるとは随分と喧嘩腰のご挨拶じゃねえか？』

皮肉気味にそう言うが、巫女はふんと鼻を鳴らしたただけだった。こりゃあ、戦闘は免れないな。幻想郷トップクラスの實力者と戦うとか死ぬって言うてるようなもんだ。今の俺じゃあ、到底勝てそうにないな。

(チツ！勝てないって思ったのは戦兎と最後の戦いをした時以来だぜ)

俺はそう思いながら何気に弾幕を放ってくる霊夢から距離をとる。恐らく話しかけても意味はないと思うから、トランスチームガンで撤退するしかねえな。

『悪いが、今日の所はお前と遊んでやる気はねえんだ。また次回を楽しみにしてけよなア』

俺はそう言ってトランスチームガンからネブユラガスを周囲に放出し、その中に隠れると人里の外に転移する。

ある程度距離を置いた場所に転移したため、俺の力を感知できない限り追ってくることは無いはずだ。多少の心配はあるがな。

くく魔理沙くく

前に零夜に頼んであったアオキノコと薬草がようやく届いた。

零夜は人里でも特に珍しい能力持ちだった。確か「素材を作り出す程度の能力」だったっけ。作り出すといっても、何も無いところから素材を作るんじゃないやなくて、それを作るための媒体となるものが一つ必要となる。例えば、木の杖を作ろうと思えば木材がいるし、ナイフを作りたければ鉄もしくは銀が必要となる。簡単な話がドラ○エに出てくる錬金みたいなもんだな。

前に「杖もナイフも素材じゃないだろ」って言ったら

「ボクにとっては杖もナイフも核爆弾も素材の部類に入るよ」

って爽やかな笑みで言ってた。核爆弾は絶対違うと思うけど。そんなもん作ったら青筋浮かべた紫来るぞ。

「ふう、なんとか回復薬が作れたな。何回か失敗したし。でも後は前妖夢に貰った蜂蜜を合成させて回復薬グレートにするだけだぜ」

実際素材の調合というのはかなり難しい。早苗曰く「外の世界では素材の調合をするために調合士になるか調合検定委3級を取らないといけない」らしい。

零夜は確か準一級持つてんだっけ。

「ま、いつか。今は取り敢えず霊夢の所でも行くか」

長時間調合していたためか、肩の筋肉が凝ってしまっている。特に凝った右肩を回して黒帽子を被った私は、箒を持って外に出る。

霊夢はこの時間起きているはずだから、なんか適当に世間話でもしようかな。

そう思いながら、箒に跨って博麗神社に向かった。

くく博麗神社くく

博麗神社に着くと霊夢に早苗、そして妖夢がいた。
私はみんなに「よっ」と声をかけると地面に着地する。

「あら魔理沙じゃない。どうしたのよ?」

あまり表情が表に出てこない霊夢は、私を見るなりお茶を出してくれる。

くうくホンつと優しい奴だよなー霊夢って。

「回復薬の調合がある程度いったから、ちよつと休憩に」

「はあ???
???
???
は憩いの場じゃないんだけどね」

そう言つて苦笑いを浮かべる霊夢。

昔は全く感情を表に出さなかつた霊夢は、数々の異変を解決し様々な人や妖怪たちと関わつて表情を出すようになっていった。

……いつまでもこんな幸せな時間が続けばいいのに。そうずっと思つていた。

くく博麗霊夢くく

最近妖怪が、群れで行動するようになってから一週間が経った。様々な所を襲っているらしく妖怪の山に守屋神社に冥界、ちよつと前には紅魔館まで。

戦ったレミリアに聞いたけど、妖怪たちを指揮していた存在がいるらしい。

半分にしたような球体に乗る、白い体を持った物凄い威圧感を持つ人物。上品な感じで口元に手を添えて「おっほっほっほっほっほ」と笑っていたらしいわね。

なんか腹が立つ笑い方だけど。

今更だけど、紅魔館を襲った妖怪の撃退でレミリアの撃退した数に負けたからって、紅魔館の半分を破壊するフランもフランで結構やばいんじゃないかしら？ その時は零夜と魔理沙がフランをなだめたみたいだけど。咲夜一日で紅魔館修復お疲れさま。

まあ、そういつたことがここんとこ多いから私も警戒しないとね。私に限って負けることは絶対じゃないけど、それでもその時の運もあるし。妖怪の大群については私の勘もあんまり働かないし。

今日やってきた庭師に「博麗神社に襲うためのものが無いのでは？」って聞かれたときは笑顔で夢想封印をお見舞いしてあげた。

えっ？ 今何やってるかって？

「霊夢、悪いんだが醤油取ってくれないか？」

「それぐらい自分で取んなよ」

神社に居候中の萃香と遊びにやってきた魔理沙との三人で晩御飯中よ。

萃香は何故か魔理沙に対してだけはあたりが強い。以前魔理の心が病んで幻想郷を危険にさらしたことがあったけど、それは機会があれば語ろうかしらね。

誰に語るつもりなのかしら私は。

「そういえば、あれから霖之助さんとはうまくいっているの？」

「ぜんっぜんだぜ」

魔理沙は小さいころから霖之助さんに恋心を抱いていて、魔理沙が異変を起こす前に霖之助さんに告白したらしいけど、あっけなく振られたらしい。霖之助さんは人間と妖怪（何の妖怪かは知らない）のハーフで、噂では幻想郷を作った紫と同一年って言われている。でも、見た目が20歳前後の好青年だから人里で女性から告白されることもあるみたい。

もつとも、魔理沙が振られたのはまだ10代というのが関係しているんだけど。

「その恋が実るといいわね」

「ありがとな霊夢」

魔理沙が満面の笑顔で笑う。その笑顔に私も思わずフツと笑みをこぼす。

その時、私の隣に突如スキマが開いて紫が現れた。

「霊夢。人里で妖怪の大群が暴れているわ」

「???
っ！」

その一言で私は立ち上がって神社を飛び出す。
なるべく紫のスキマは使わない。アイツは最近結界とかで忙しいから。

神社を飛び出す前に魔理沙が「頑張れ〜」なんて言ってくる。いやちよつとはアンタも手伝いなさいよ！なんて、無駄よね。

〜人里〜

私が入りに着いた時、突然数体の妖怪が飛んできた。

私を襲ってきたというよりは何かによって飛ばされた、というのが正しいかしら。

私は飛んできたほうを見る。

そこには赤を基調とした禍々しい雰囲気を出す鎧の男がいた。後ろにはボロボロになって怪我をした慧音と服のあちらこちらが焼け焦げている妹紅がいた。

奴は二人に振り向いて何かを話している。二人もかなり警戒して

いる。

「あの二人には借りがあるし、アイツもなんだかほつといたら面倒な気がするし???あーもう、面倒くさい！ 退治しちゃえばいいのよそんなの」

そう言つて私は後ろを向いているアイツに向かつて

霊符「夢想封印」

私のお馴染みであり最強の技を繰り出した。

でも、

『ふん』

私の技を手を持っていた赤い銃で光線を放ち、私の夢想封印を撃ち抜いた。その瞬間、エネルギー同士のぶつかり合いにより爆発が起きる。私は地面に降り立ち、煙が晴れるのを待つ。

私の技がこの幻想郷でいかに強かろうが、一発で倒せるほど己惚れているわけではない。

その証拠としてアイツの鎧には傷一つない状態で煙の中から出てきた。

次回に続く

第四話 「隙間の大妖怪」

やア、読者の諸君。俺の名はエボルト。地球外生命であり星狩りの一族だ。俺はある日、俺自身が育て上げた仮面ライダービルドこと桐生戦兔に敗れ、この幻想世界で蘇った。話は変わるが俺は今まで感情というものを知らなかった。仮面ライダービルドジーニアスフォームの攻撃を受け、感情を知るようになるまではな。

だが、それでも『恐怖』というものまでは知らなかった。いや、戦兔に敗れ消滅するまでの間はとても恐ろしかったが、そうではなくてな。

まア、何が言いたいのかといえ、だ。

まさかこの俺が、突然現れた絶世の美女に恐怖を抱くなんてなア。誰も思わないだろ？

数分前……

人里に現れた博麗霊夢から逃れた俺は人里からある程度距離のある場所に転移し、変身を解いた。そして、霊夢がいなくなったであろう時間を見定めて、人里に戻った俺は、慧音に物凄く心配された。

普段から俺が乗り移っているこの体の宿主である零夜は、能力関係の仕事の為に里から出ることが多いらしく、慧音達はいつも心配して

いたらしい。里に入った瞬間に抱き締められた時は、顔が慧音の胸の中に埋まって窒息死するかと思っただぜ。

まあ、そんなこんながあつて俺は、零夜の家に入る。自分の家ではないのに、何だか落ち着く感じがするなあ。恐らく俺が零夜の体を使っているからだろうが。

「いやア、幻想郷ってんのも案外悪くないもんだなア」

零夜の顔でとてつもなく悪い顔をする。幻想郷にはスペルカードというものが存在し、博麗の巫女のもと弾幕勝負というものが作られ、そのためのルールまでがある。零夜の記憶を覗いた俺はこれを見て元いた世界では味わえなかったスリルを楽しめるんじゃないかと考えた。

「あら？随分と楽しそうに笑うのね、地球外生命エボルトさん？」

後ろから声がかかった瞬間俺は振り返って大きく跳んだ。まさかいつの間にか後ろに誰かいるなんて誰が思うのだろうか？

そして目の前にいる人物を見て、いきなり現れたのも納得がいった。なぜなら、

「八雲紫……」

妖怪の賢者と呼ばれるほどの実力を持つ大妖怪八雲紫が自らが開いた隙間に腰を置いて、美しく目を細めながら居たからだ。

『ふん。妖怪の賢者とまで呼ばれるお前が、いったい俺になん用のだア?』

俺は零夜としての口調ではなく、エボルトとしての口調で話す。

「あら? そんなあつきりと正体を表してもいいのかしら?」

『どうせバレてるんだ。だったら潔くしたほうがいいだろう?』

俺の言葉に「そもそもそうね」微笑む紫。クソ! こいつがなんの目的をもって俺に接触してきたのが全然分からねえ。零夜の記憶通りなら、俺は紫と話をする前にとくに消されているはずだ。

「そう身構えなくてもいいわ。私はあなたと話をしに来たの」

『分からねえなア? お前は危険分子と取られてたやつは問答無用で消してきたんだろう? だったら俺を消しに来るって思うのも同然だ。ま、今の俺じゃあ、お前には到底勝てないがな』

「じゃあ、力さえ元に戻れば私に勝てるっても?」

威圧感を放ちながら話す紫に少し圧倒されながらも、俺は飄々とした感じで肩をすくめる。勝てるとは思ってはいない。勝てる可能性が上がるとは思っているが。

「正直に言えば、あなたをここで消すことぐらい私にとってはいつでも出来る。でもあなたを消してしまえば此方としても不都合が生じるの」

『ほう？それはどういう意味だ？』

「だって、あなたをこの幻想郷に呼んだのは私よ？呼んだ張本人が消してどうするのよ」

紫の言ったことが俺には理解できなかった。俺ほど悪行を犯し、罪を重ねたヤツなんてそれほどいないって思ってる。まア、もしかしたら俺が知らないだけで他にもいるかもしれないねえがな。

それでも俺のような危険分子を自らが呼び出したというコイツの頭が信じられなかった。

「あなたの持つエボルドライバーは私が責任をもって修理をしてあげる。それを直せる人に心当たりがあるからね」

そう言って隙間を開いた紫の手には、俺が所持していたはずのエボルドライバーが握られていた。

『流石は境界を操る程度の能力だねえ。いいぜ、そのエボルドライバーを直せるって言うのなら任せてやるよ。正直戦兔以外にそいつを直せるやつがいるとは思えねエがなア』

ニタニタ笑いながら煽る俺に対して、紫は不愉快な顔を一切見せずむしろ微笑んだ。

「二週間もあれば完璧に直っているわ。幻想郷に居るその子の技術では、その戦兔という子みたいには出来ないもの」

そう言って隙間の中に潜っていくのを見届けた俺は、思わず床に手をつけた。それ程までに紫から迫り来るプレッシャーは恐ろしいものだった。

『忘れてだぜ。この世界が人外魔境の幻想郷だということをよオ』

一人になった部屋の中でエボルトの声だけが響いていく。

第五話 「博麗神社」

八雲紫がいなくなったあと、いつの間にか俺（零夜）の机の上に一枚の手紙が置いてあった。この家は零夜が外に出ている間は基本鍵を閉めているらしいので、俺以外は入れないはず。空間を無視して移動出来るやつじゃない限りは無理だ。

「八雲紫のやつだな？ 一体何が目的なんだよ……たくっ」

一向に紫の目的がわからない以上、この手紙を無闇に開けるものじゃあない。だが、開けなければいけない。そう俺は感じた。

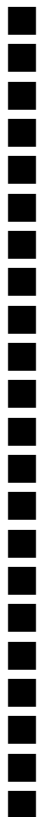
【明日、時間帯はいつでもいいから博麗神社に行くことをオススメするわ】

博麗神社つていやあ、確か博麗霊夢が住んでいる寂れた神社だったよな？ 奴は信用出来ない。今まで数多くの人間を、ましては同胞さえも騙してきた俺が言えたことじゃないが、奴は何かを隠している。それもとても重要なものをな。

だが、手紙を置いていったってことは、俺がそれを行かなかつたらせつかく預けたエボルドライバーを修理してもらえなくなる可能性もある。それだけは何としても避けたい。まだあの世界に生きていた頃は目的の為にわざわざ人間の命令を聞いてやったこともあったが、今更誰かに指図命令されてまで目的を果たしたいとは思わない。

『まあ、行つといた方が得策つてもんだよなア?』

そう言ってニヤリと笑った俺は、明日に備えてベッドに潜り寝ることにした。



ベッドに潜って寝始めたエボルトの事を、バレないように妖力で隠した隙間から覗いていた紫は少しだけ微笑んだ。

友人から貰った扇子で口元を隠すと、

「フフツ。そう。今は私の言うことを聞いていて頂戴。そうすればあなたの望みを叶えてあげるから、ね?」

まるで母親のような慈愛に満ちた笑みを浮かべる。

「あなたもそうは思わないかしら? かつて、エボルトが感情を知るときっかけとなった仮面ライダー……桐生戦兎さん?」

そう言つて後ろを振り返つた紫の前に立っていたのは、正義と愛、LOVE&Peaceのために戦つた仮面ライダービルド、桐生戦兎だった。



くく博麗神社くく

手紙に書かれていた通り博麗神社にやってきた俺は、博麗神社の惨状を見て言葉を失った。どうやら霊夢は今買い出しにでも行っているのか、ここにはいなかった。つてか、記憶を覗いた時から知っていたのはいたが、ここには滅多に賽銭をしに来るものはいないと聞く。だからこそ霊夢は常に貧乏な生活をしているらしい。

ちよつと可愛そうだアって思ってしまった。仕方ないので賽銭箱に百円玉を十個ほど入れて置いてやる。普段能力を用いた仕事をし

ている零夜のお金は金持ちレベルと言ってもいい。だからこれぐらいなら零夜も許してくれるだろう。

あー死ぬ前の俺がやるような事じゃねえけど、感情ってんのがここまで面倒だったとは。まア、そのおかげで人間ってのがまた一つ知れた気はするがな。その事については戦兎には感謝している。

と、そんなことを考えていると、この博麗神社の住人霊夢が袋に野菜とかを入れて帰ってきた。本当に買い出しに行っていたようだ。

「あら、零夜じゃない。博麗神社になにかよう？」

霊夢が不思議そうに聞いてくる。零夜の記憶を覗いた時に、霊夢が零夜に好意を抱いていることを知った。あいにく零夜はかなりの鈍感みだから気付いていないみたいだがな。

「いやあ、紫さんに呼ばれてきてたんですよ」

俺が乗っ取る前の零夜はかなり交友関係が多かったためか、紫からとても信頼されていた。おそらく能力と零夜自身の性格もあって信頼されているのだと思うが。だからこそ俺がここにいる理由に関してはこのような嘘についてもバレないはずだ。零夜が紫に信頼されている事については霊夢も知っている。

「そう。紫にね。じゃあもう終わったの？紫の姿が見えないけど」

「はい。紫さんは僕に用事を伝えるともう帰られましたよ。じゃあ僕

も帰りますね」

俺はそう言って霊夢の隣を通り過ぎ、階段を降りようと足をつける。

「別に、まだ帰らなくてもいいじゃない。だってあなたは……私に退治されるのだから!!」

後ろからそんな声が聞こえたと思った途端、凄まじい量の弾幕が俺の背中に向かって迫ってくる。それに気づいた俺は横に大きく飛んで、大量の弾幕を躲していく。

「ふん！私が気づいていないと思ったのかしら？」

お祓い棒を構える霊夢を俺は睨む。

「いつまで神崎零夜の仮面をかぶっているつもりかしら？ 貴方が昨日の鎧騎士であることは勘で知っているわ」

ありや？ 勘ってなんだけ？

「いつもだったらすぐ退治するんだけど、貴方には選択肢をあげるわ。私に今すぐ退治されるか、それとも戦って退治されるか」

選択肢ってなんだっけ？

『それは選択肢って言わないんだが、知ってるか？』

「ええ、知っているわ。でも、幻想郷の素敵な楽園の巫女直々に退治するのよ？ 誇りに思っていていいわ」

だめだこいつ。言葉が通じねえ。

『はあ、めんどつちいが、仕方ねえか』

そう言って立ち上がった俺は、懐からトランススチームガンを取り出すと、コブラフルボトルをセットする。

コブラ！

『蒸血』

俺は掛け声とともにトランススチームガンのトリガーを引く。するとトランススチームガンからネブユラガスが放出され、俺の周りを包んでいく。

ミストマッチ…！　コ・コツ・コブラ…！　コブラ…！
ファイヤー！

『楽しい宴をありがとうよ』

周りに充満していたネブユラガスから現れた俺の体は、赤い鎧に包まれ、水色と赤の兜を被っていた。

『さア、始めようかア』

俺はそう言つて霊夢に殴りかかった。

第六話 「宇宙の帝王と始まりの戦士」

零夜の記憶を見た当初は、博麗霊夢の事はそこまで強そうとは思わなかった。こんな小娘にこの幻想郷を守れるのかとすら思った。だが、実際に戦ってみれば、かなりの修羅場をくぐり抜けてきた戦士のように強かった。

まア、何が言いてエのかと言えばな？

俺、あんな小娘に無様に負けたんだよ。腹ただしいぐらいにな。感情を手に入れてしまったてからは、こういったことにもイラついてしまう。今まで無かった感じに自分でも笑ってしまう。

『まさか……人里近くまでぶっ飛ばされるとはなア、一体誰が思うってんだ全ク』

ブツブツと文句を言いながら、ぶつかつた木に背もたれしていた俺は、人里に迫る大量の気配を感じる。その中の一つだけが物凄く強大で馬鹿でかい力の持ち主のようだ。霊夢に負けた腹いせに、ちよつと潰してくるか。

くく人里くく

私の名は上白澤慧音かわしらせわけいねと言う。今私達は人里に迫り来る強大な気配に対策を取り掛かっていた。前回の時のように妹紅にも来てもらたし、紫にも伝えたからそのうち霊夢も来るだろう。

だが、それでも安心はできない。またブラッドスタークが現れる可能性があるからだ。彼の事について正直幻想郷では誰も知らないと思う。恐らく紫あたりなら知っている可能性はあると思うが……それでも油断ならない相手だ。敵か味方かもわからない彼が来てしまつては、下手したらこちら側にも被害が出るかもしれない。何しろ紫のような信頼ならない所があるからだ。

そんなことをずっと考え込んでいると、いつの間にか隣に座っていた妹紅が口を開く。

「慧音。随分と緊張してるな」

「そりゃあそうだ。お前達蓬莱人みたいに、魂があれば何度でも蘇生できる訳では無いからな。もしかしたらここで死んでしまうかもしれない。そう考えたら怖いんだ」

藤原妹紅や蓬莱山輝夜に無限に生き返られるわけではないから、半人半妖である私も簡単に死ぬかもしれない。だからこそ怖い。

妹紅は輝夜と出会う前に何度も何度も生と死を繰り返しているからか、死に対する感覚が麻痺してしまっている。だから私のこの弱気や言葉を聞き、にも言えなくなってしまったのか黙り込んでしまう。

「済まない。気が動転していたようだ」

「いや、私の方こそごめん。慧音がそんなことを考えているのに気づかなくて」

お互いに謝ると、突然門番をしていた男が「き、来たぞー！ー！！」と大声をあげる。

ついに来てしまったか。もう覚悟を決めねばならないな。私がモタモタして村の子供達に何かあったら大変だ。

「行くぞ慧音。別にこれが最後って訳じゃないんだ」

「そうだな。行こう」

ようやく覚悟が決まった私は、妹紅と共に村の外に出る。

〳〳人里の外〳〳

慧音達が村から出てみると、外には下級とはいえ妖怪の大軍が迫っていた。その奥には半球に座る白い体の男がいる。恐らくこの大軍を指揮するボスだろう。

「オーホツホツホツホツホツ！さあ、皆さん！人間達を皆殺しにするのです」

男の声が上がると、妖怪達が雄叫びを明けながら村に突撃してくる。

―恋符『マスタースパーク』―

突然魔法の森から妖怪の大軍に向かって大きなレーザーが通る。カラフルなレーザーは威力が大きいので、半分以下ぐらいの妖怪を消し炭にしていた。

「助っ人に来たぜ」

箒に乗って空を飛んできた魔理沙がニカツて笑う。

あまり火力の大きい技を持たない私たちにとって、全ての技が高火力の魔理沙の助太刀はかなり頼もしい。

「助かったぜ魔理沙!!」

妹紅が笑う。慧音的には助太刀にしては来るのが早いんじゃないのかと思つたが、それは無粋なことだと自分で納得する。

妖怪達はまだまだ沢山存在している。戦いは始まったばかりである。

数時間後……

途中で霊夢も参戦しそれなりに妖怪達を倒した慧音達は、未だ大軍の後ろから出てこない男の方を見る。

「アイツ、一向に動かないけどさ。まさか、あまりにも私たちが強すぎて恐れ入ったんじゃないか？」

魔理沙が馬鹿にしたように笑う。実際馬鹿にしているのだが。様々な技を使う魔理沙からしたら後ろで何もしない奴に腹を立てているのかもしれない。

その様子に霊夢が注意しようとした時だった。

「それじゃあ、ボクが直接来たらいってことかな？」

突然の事に全員が驚き、その場から跳ぶ。魔理沙は恐怖で動けない。なぜなら、いつの間にか自分の後ろを陣取っているからだ。男が

最初にいた場所からかなり距離があった。普通ならこんな早く来る
ことなどできるはずがない。

そう、普通なら。

「ボクはこれでも宇宙を支配していた帝王フリーザ様でね。君のよう
な雑魚の戯言だろうと怒ることなどしないんだよ。でもね？今君を
殺しておけば君たちの陣営を崩せると思わないかい？」

そう言っつて勢いよく魔理沙を蹴ると、尻尾を使って魔理沙の首を締
め上げる。

「ぐうう!?!があー！」

強さの次元が違うフリーザに魔理沙の目から涙が溢れ出る。自分
はこれなら殺される。それを感じとったからだ。

「ッ！魔理沙を離しなさい!!」

親友が今まさに殺されそうになっている状況に、霊夢は思わず飛び
だして夢想封印を使う。だが、フリーザの気弾によって全て弾かれて
しまう。そのうちの一つが霊夢にあたり地面に落ちる。

「ふん。雑魚は雑魚らしく大人しくしてればよかつたものを」

フリーザはゆっくりと霊夢に近づくと、その小さな体を踏みつける。グリグリと押さえつけて、じわじわと痛めつけるように。

「ああ、あああああああああああああつ!!」

気弾が当たって少し火傷した場所を踏みつけられ、涙を出しながら悲鳴をあげる。

そこから蹴りつけると、霊夢に向かって人差し指を向ける。フリーザが好んで使う『デスビーム』をしようとしているのだ。

「君たちのような友情とかがボクは大っ嫌いだね。じわじわと殺していくつもりだったが変えてあげるよ。今すぐに殺してあげる」

「や、やめろおおおおおおお!!」

妹紅が全身を炎で燃やしながらフリーザに突撃する。だが、いくら何度でも蘇る蓬莱人とはいえ体力が切れてしまつて意味がない。妹紅の体を燃やしていた炎が消滅してその場に倒れる。

「クソ！クソオオオ!!」

妹紅が涙を流しながら地面を殴る。

血で濡れた真っ赤なバンダナをした黒髪の青年が、遠くから飛んできてフリーザを殴り飛ばした。

第七話 「現れし絶望を与える悪魔」

突然現れた黒髪の戦士を見て、俺は「ほう？」と声をこぼす。あの戦士は、霊夢やうつとしいフリーザよりも修羅場をくぐり抜けてきた正に最強の戦士だ。

俺を消滅させるまでに追い詰めた戦兎達も、戦士と呼ぶに相応しい強さを持っていたな。……早くエボルドライバー直らないかな？

「はあい。元気してたかしら？」

俺の後ろから声がするが、前にも一回やられているので驚くことも無く後ろを振り向く。

『……紫か。なんのようだア？』

「あら？そんな態度とってもいいのかしら？せつかく修理し終えたドライバーを持ってきてあげたのに」

その言葉に俺は『なに!?!』と叫びながら紫の肩を掴む。思わず力が入ったようで紫の眉が歪む。

「そんなに慌てないの。ほら、これよ」

手渡されたエボルドライバーを触り、本当に直っているのが分か

る。以前使用とした時は、まさかの故障して起動しなかったため、仕方なくトランスチームガンを使っていたが、これでもう、その必要もなくなる。

『礼を言うぜ紫。ありがとよ』

「別に構わないわ。貴方にはこれから私の頼みを聞いてもらいたいの」

『ククク。別にいいだろう。それぐらいなら、な』

そう言つて腰にエボルドライバーを装着した俺は、コブラエボルボトルとライダーエボルボトルをエボルドライバーにセットする。

「コブラ！ライダーシステム！エボリキューション！」

俺はドライバーについているレバーを勢いよく回すと、顔の前で手をクロスさせる。

【Are you ready?】

覚悟はいいか？そんな当たり前に聞いてくるドライバーに……

『変身!』

そう、答えた。

「コブラ! コブラ! エボルコブラ!
ハッハッハ!」

フッハッハッハッ

霧のかかったような状態のハーフボディが生成され、エボルトの体に合体すると、霧のようなものが吹きとぼされる。

「エボル、フエーズ1……」

ここに、最強の仮面ライダーが再び復活を果たした。

くく人里の外くく

突然現れてフリーザを殴り飛ばした男は、男は吹き飛んでいったフリーザを警戒しながら睨む。フリーザの周りにはぶつかったことにより崩れた瓦礫などで積み上がっている。

その威力は近くで見えていた霊夢達でさえも恐れおののくほどだった。だが。これで倒れるとは男は微塵も思っていない。

「ッ!？」

直後瓦礫のある場所から、気が膨れ上がるのが分かった。直ぐに攻撃にうつれるように構える。

瓦礫が膨れ上がった気によって吹き飛ばされ、中からフリーザが現れる。所々血が出ており、霊夢立ちが束になっても傷一つつけられなかったのを、この男はただ殴っただけで傷をつけた。

「まさか、お前が生きているとは思わなかったよ……バーダック」

「そうか？オレはテメエが生きてるって思ってたぜ？」

バーダックと呼ばれた男は、目を細めると一瞬でフリーザの前に現れ殴る。すると今度はその後ろに現れ蹴り飛ばし、最後に背中を見せた状態でフリーザの前に現れると、右手に集めた気弾をフリーザにぶつける。

「くたばりやがれえええええ!!」

フリーザにぶつかった気弾は爆発を起こし、辺り一面に煙が充満する。

「ふん」

腕組みしながらフリーザが出てくるのを待つが、一向に出てくる気配がない。そう思っていた霊夢達。だがフリーザはバーダックの真後ろに出現するとデスビームをお見舞いしようとする。それを予想していたのかバーダックは裏拳でフリーザをぶっ飛ばす。

「ぐうううう。ボクが惑星ベジータを滅ぼす前よりも強くなってるみたいじゃないか。でもね、強くなっているのは何もお前だけじゃない

一気にフリーザの目の前に現れたバーダックは、フリーザの腹に殴りその拳に溜めた気を放つ。至近距離から爆発した気を受けたフリーザはどうとう倒れ込む。

「二度と蘇られねえように消し炭にしてやらあ」

フリーザに向けた手から気弾を放とうとする。

【エボルテックファイニッシュ！チャオ〜】

突然聞こえた機械音声がして、バーダックはそこから退く。すると先程までバーダックのいた所に何者かが蹴り技と共に降りてくると、爆発が起こる。

『随分と、楽しそうな事をしてるじゃねエか。俺も混ぜてくれよ』

煙の中から聞こえたその声を聞いた霊夢と妹紅、慧音は戦慄を覚えた。何しろ、その声は三人が忘れたくても忘れられない声だったからだ。

「エボルト……」

煙の中から現れたのはコブラを思わせる鎧を着たエボルトもとい
仮面ライダーエボルだった。

第八話 「妖怪の賢者」

「誰だテメエは？」

突然の来訪者にバーダックは目を細める。そして、警戒しながらエボルに問う。エボルは少し笑いながら、

『んじや、改めて自己紹介と行くかア。俺の名は地球外生命体エボルト。またの名を仮面ライダーエボルだ。覚えておいてくれよ？』

腕組をしながら愉快そうに名乗る。その足元にはフリーザがエボルによって動けないように足で踏まれていた。屈辱的な行為を受けたフリーザは動かすことの出来ない状況に悔しそうに歯ぎしりする。それを見たバーダックは何を思ったのか、スーパーサイヤ人を解除して通常時のサイヤ人に戻る。

「ふん。てめえが何者で、なんの用があつてここに来たのかは興味ねえ。だが、俺はこの“幻想郷”を恐怖に陥れようつてんなら容赦しねえからな」

そう言うとう宙に浮いたバーダックは魔法の森に飛んでいく。それをやれやれと言った感じのため息を吐く。

『食えねえ男だなア。まあいいが。』

そう呟くエボルは足元で踏まれているフリーザを蹴飛ばすと、エボルテックフィニッシュで声を上げることにも許さないままフリーザを蹴る。フリーザは驚いた顔のまま爆発を起こし死んでしまった。

その後未だ倒れている霊夢達の方を見る。以前よりも圧倒的な力に怯えている霊夢達にゆっくりと近づく。それにビクツとなる霊夢達。

『そう怯えるなよオ。悲しくなるだろう?』

愉快そうな声で笑いながら近づいてくるが、突如霊夢達の前に現れた隙間を見て足を止める。そしてまた笑う。

『おやおやア?まさか、お前が来るとはなア?』

「霊夢達に危害を加えるつもりなら即消すわよ」

怒りに充ちたその凄みに霊夢達は軽く萎縮する。幻想郷の賢者と呼ばれる彼女がここまで怒りを表すのは、天子が博麗神社をぶっ壊した以来になる。

紫は普段温厚な性格をしている。多少失礼な事を言ってしまったても笑って許してくれる。だが、そんな彼女が本気で怒りを表すのは、彼女が愛する幻想郷に危害を加えようとした時。

幻想郷のどこかに存在すると言われているマヨイガを拠点とし隙間を使って幻想郷の状態を把握しているらしい。そんな彼女にとっ

てエボルは正に幻想郷によって害になる存在だった。
だが、

(わかんねえな)

エボルは心の中でそう呟く。

エボルにとって紫は、危険人物である自分をわざわざ生かし、そしてエボルになるための必須アイテムエボルドライバーを直した張本人だ。エボルドライバーを直したことはエボルにとって感謝することではあるが、それを使って少し力を示したぐらいで何故ここまで怒られないといけないのか、それが彼には理解できなかった。

それに彼女の様子を見る限り、エボルのことを知らないと思える。それはおかしい。霊夢達に知られたくないから隠している可能性はある。だが、それならここまで怒りを表すのはおかしい。エボルはこの幻想郷を壊す気などさらさらない。壊してしまえば自分が死ぬ可能性があるので。せつかく生き逃れたこの命をわざわざ無下にすることなど感情を知った今のエボルには出来ない。

『お前は、俺が知っている紫とは違う人物のようだな』

普段はふざけた雰囲気でも周りをイラつかせることに定評のあるエボルトはこの時かなり真面目にことを考えていた。

そして、エボルトの呟きが聞こえたのか、紫は怪訝そうや表情をす
る。

「あなたの知っている私何かは知らないけど、洗いざらい話しても

らうわよ！」

そうやって紫が無数の弾幕を放ってくる。それは正に幻想と言っても過言ではない美しさの表れ。それをいとも容易く証言した弾幕だった。

『ちっ！』

少しばかりそれを見惚れてしまったエボルは目の前にまで弾幕が迫ってきていることに気づき、慌てる様子もなく冷静に弾幕を潰していく。

『なんとという面倒くさい』

彼の口から愚痴に似たような言葉が出てくるが、そんなことに構わず弾幕の量は増えていく。流石のエボルも少しイラってしてきた。

エボルドライバーのレバーを勢いよく回すと蹴る体勢につく。

【エボルテックファイニッシュ！チャオ〜】

咄嗟に足に溜めたエネルギーでエボルに向かって飛んでくる弾幕を爆発させる。それに伴ってエボルの周辺を煙が充満し、その中に隠れる。

紫はどこから現れてもいいように警戒をする。エボルの気配は幻

想郷の守護者である紫でさえも感知することが出来ない。だからこそ余計に警戒を解くことなどできなかつた。

『残念だったなあ?』

だが、そんな彼女の予想を遙かに上回るかのように、エボルは紫の真後ろに現れる。そして既にレバーを回していたのか、エボルの足に強大なエネルギーが溜まっていた。

『あばよ。幻想郷の守護者様』

思わず紫は目を瞑ってしまう。だが、一向に痛みはやってこない。何があったのか確認するために目を開くと、そこにはエボルの姿がこれっぽっちも無くなっていた。

「どうなっているの?」

思わず眩いてしまう。だからこそ彼女は気づいていなかった。先程までエボルがいた場所に薄くだが、オーロラのようなものが消えようとしていたことを。

第二章・地底妖怪と紅き弓兵 第一話「世界の破壊者」

訳のわからない浮遊間に包まれながら、エボルはどこか違う場所に放り出された。どこかの洞窟の中なのか天井には壁や天井から突き出た岩などがある。だが、洞窟にしては薄暗くもなくむしろ明るい。まるで電気の着いた家の中にいるかのよう。

彼の目の前には大きな屋敷がある。その大きさと来たら以前見た紅魔館よりも大きかった。多分内装は紅魔館の方が大きいと思うが。

『はア……ここがどこだか知らねえが取り敢えず変身を解いてもいいだろう』

そう言つてエボルドライバーからエボルボトルを抜いたエボルトは、変身前の神崎零夜の姿に戻る。

その瞬間、彼な体が傾く。咄嗟に膝をついて倒れるのを阻止した零夜は、体が異常なほど疲れているのを感じ取る。

『くう……さ、流星に、この体でエボルドライバーを使うのは無理すぎたか』

元々この体はエボルドライバーを使うための基準を達してすらない。それをエボルトの力でむりやり変身したようなものだった。そして、この体にはエボルドライバーやビルドドライバーを使うためのネブユラガスがない普通の人間の体だ。それを生身で使用し、長時間変身していた。体に異常がないはずがなかった。本来なら、ネブユ

ラガスが搭載されていない体で変身すれば直ちに体が崩壊し、そのまま死に至る。だが、それをエボルトの力でどうにかしたようなもの。

「くっ……少し体を休めないとな……」

「だったら……その屋敷の主に休ませてもらえばいい」

突然背後から聞こえた声に驚くエボルトは、後ろに振り返ると痛む体を見失って大きく跳ぶ。振り返った先には黒いジャケットを羽織りマゼンタのセーターを着た男が壁を背にして佇んでいる。セーターと同じ色のトイカメラがかなり印象的に思える。

男は壁から離れて屋敷の前まで来ると、エボルトの方を向く。その気配からして絶対に油断ならない強者である事がエボルトにはわかった。

「お前……一体何者だア？」

「俺か？俺は門矢士。ただの通りすがりの旅人さ」

警戒心MAXのエボルトに対し、男はどこか飄々とした感じで答える。

「まあ、そうだな……仮面ライダーディケイド、そう言えばわかるか？」

デイケイド……その名を聞いた瞬間、エボルトは即座にエボルドライバーを取り出す。だが、先程の戦闘の影響なのか、エボルドライバーはうんともすんとも起動しなくなっていた。

「ちっ！マジかよ……」

「安心しろ。今は危害を加えるつもりは無い」

「今はって事は危害を加えるつもりもあるんだろ？」

男は「さあな」と言うと、灰色のカーテンのようなものを出現させその中に入っていく。灰色のカーテンが消えると男の姿はどこにもなかった。

「な、なんなだったんだアイツは？」

誰もいない空間の中、エボルトの呟いた声だけが響いていた。

第二話 「地霊殿と古明地姉妹」

あの門矢士という男の言う通り、この屋敷で少し休ませてもらおうと考えた俺は、(零夜の記憶から地霊殿と言うらしい)この屋敷の中をウロウロしていたんだが、どうやら相当広いらしく俺は……

正直に言おう！

普通に道に迷った!!

まあ、まさかの記憶には地霊殿に関する知識しかなかったから、適当に歩き回る必要があったんだがな。零夜の記憶には紅魔館で色々迷ってた事があつたらしいが、せめてここにも着とけよな。

「クスッ。お兄さんこっち」

どうしようか悩んでた時、俺以外誰もいないこの部屋で少女の声が聞こえた。俺がただの人間だったなら驚いたりしただろうが、生憎と俺は星狩りのブラッド族だ。怖いもんなかない。

声のする方に向かって歩いていくと、一つの扉があつた。甲板らしきものに『さとり様の部屋』って書いてあるから、ここが零夜の記憶にあるさとり妖怪古明地さとの部屋というわけか。

まあ、相手がどんな奴だろうと俺の邪魔をするなら消すだけだな。

だがまあ、最初から潰しにかかるわけじゃねえしな。最初の挨拶ぐらいはしておくか？

そう思いながら俺は、目の前の扉に手をかける。

くく博麗神社くく

フリーザ襲来、エボルトの登場があつてから数時間が経ち、先程まで人里にいた霊夢達は博麗神社に戻ってきた。メンバーは、【幻想郷の不敵な楽園の巫女】博麗霊夢、【普通の魔法使い】霧雨魔理沙、【人里の守護者】上白沢慧音、【蓬莱人】藤原妹紅、【妖怪の賢者】八雲紫、その従者【策士の九尾】八雲藍。そして先程の戦いにはいなかった紅魔館組、白玉楼組。

紅魔館組は【紅き幼い吸血鬼】レミリア・スカーレット、【純粹なる悪魔の妹】フランドール・スカーレット、【完璧な従者】十六夜咲夜、【眠りの門番】紅美鈴「私だけ名前が酷くないですか!」「美鈴五月蠅い」「妹様すみません」気を取り直して、【動かない第図書館】パチュリー・ノーレッジ（小悪魔はお留守番）。

白玉楼組は【半人半霊の二刀剣士】魂魄妖夢、【天衣無縫の亡霊姫】

西行寺幽々子。

「まず、最初に聞いておくけど、あの奇妙な鎧騎士について知ってる奴はいる？」

霊夢の問いに誰もがフルフルと首を横に振る。似たような奴に遭遇している妹紅、慧音、紫の三人も同意。

「なら、アイツはいつからいたのか誰も知らないのね？」

先程と同様に首を振る。あまりにも情報の少なさに頭を抱えたくなった。だが、

「そいつについては知っている」

突然霊夢の後ろに出現したオーロラカーテンから姿を現す門矢士。霊夢と魔理沙、紫を除いたみんなが驚く中、士は堂々とした振る舞いで柱に背を預け腕を組む。

「アイツは地球外生命エボルト。またの名を仮面ライダーエボル。かつて仮面ライダービルドの世界で火星を滅ぼした奴だ」

士の説明を聞き、そもそも『火星』を知らない面々の頭にハテナが

浮かぶ。士は「そこからか……」と少し呆れている。説明する気は無
いようだが。

「はあ、いい質問していい？」

「なんだ？」

こてんと可愛らしく首を傾げたフランが元氣よく手を上げる。そ
の様子に咲夜が鼻血を垂らす。

「エボルトさんって悪い人？」

「悪い人か……まあ、元は悪いやつだな」

「元？今は良い奴なのか？」

齒切れの悪い答えに魔理沙が気になったようだ。胡座をかいて士
に尋ねる。

「それについては俺は知らん。次会った時にでも聞けばいいだろ……
まあ、聞いても答えないと思うがな」

最後に少しボソツと呟いた士は、博麗神社の外に出るとオーロラカーテンを出現させる。その行動に驚いたのは紫だった。

「ちよつとどこに行く気よ？」

「どこでもいいだろう……そう言いたいところだが、一つだけ。とある世界から誰か連れてくる……とだけ言っておく」

あまり理解のできないセリフを吐いた士は、オーロラカーテンの中に消えてゆく。

「ホントに神出鬼没で自分勝手な人ねえ……」

思わず紫の呟いたその言葉に全員が（お前が言うな！）と心の中で叫んだのだった。

(ここに、この屋敷……地霊殿の主がいるのかア。どんなやつなのか
楽しみだ。こここの地底だけは知識としか記憶には無かったからなア)

少しばかりの楽しみを入れながら、ノックもせず俺はドアを開け
る。中は書庫のような部屋なようで、奥には大きな机と大量の書類が
山住になっていた。

え、なにこれ？

「このような暗い場所にノックもせず客が来るなんて……まあいい
わ。仕事も一段落終わったところだし」

そうやって奥の机の方から書類の山で隠れて見えなかった少女が
出てきた。

若干気だるさそうにしているのは、あの書類の山から考えて何日も
徹夜をしていたからと俺は思うが、確かこいつって妖怪だよなア？零
夜の記憶にあった古明地悟りの姉妖と一致するんだけど。悟り妖怪ってい
う名前の情報しかなかったから、あとは推察するしかないけど。

少しボサボサ気味のピンクの髪に半目になった桃色の瞳。首あたりから伸びた管のようなものの先についた第三の目、少し大きめの水色の服。書類に取り掛かっていたからか眼鏡をかけている様子はどこ価値的な印象を受けるが元からな気がする。うん。

「それで、こんな薄暗くて誰もこなさそうな根暗過ぎる地霊殿に何か用ですか？用がないならすぐに帰ってください」

地底を統べる妖怪だと記憶にあったからどのようなものかと思えば、

(すっげえネガティブなんですけどおおおおおおお!!??)

「いや、なんか知らないうちに地底に飛ばされてて、その時に出会った男にここに泊まらせてもらえって言われてきたんだけど……」

ジトつとした目を向けられ咄嗟に嘘を混ぜた言葉を吐いていく。悟り妖怪は片目を閉じて俺をじつと見てくる。

「な、なんだよ？」

「いえ。貴方の心は何故か読むことが出来ないのなぜかと思いましたが」

「は？心？やっぱりお前悟り妖怪？」

やべえ。思わず口が滑った。ほら見ろ！悟り妖怪の目が胡散臭い目から疑いの目に変わったぞ!!……これなんか変わったのか？

「どうやら私のことをご存知のようですね。心を読めないから何を考えてるのは知りませんが」

「さあ、どうだろうね」

「そろそろ人間を演じるのはやめた方がいいんじゃないですか？」

その何気なく放たれた言葉に俺は寒気を感じた。心は読めなくても何者かは大体わかるって様子だな。はあ……全くここいらの連中は勘の鋭い奴らが多くないか？

『まあ、そうだな。確かに俺は演じていた。だが、これだって訳あってやってる事だよ』

人間のふりがもう出来ないかと判断した俺は、正直に元の自声で話す。

悟り妖怪は俺が素直に自声で話すとは思っていなかったのか、一瞬だけ目を見開いた。

「やけに素直ですね。貴方から感じるその邪悪さからはぐらかすと
思っていました」

『もう既に地上で一人にバレてるんでな。そいつ以外にもスキマ妖怪
にも……』

「どうしました?」

『いや、なんでもない。取り敢えず、だ。俺がここに来たのは、少し休
ませて欲しいからだ。連戦続きでな』

「まあ、問題を起こさなければ私は別に構いませんが」

面倒臭そうに言う悟り妖怪の頬が少しだけ上がっているのを見る
に、おそらく楽しんでるな。

「さとり様ー。終わったよー」

俺が言えたことじゃないが、背中に烏羽をつけ右手に細長い棒のよ
うなものをつけた黒髪の少女がいきなり扉を開けたせいで俺の頭に
思いつきり扉をぶつけた。何してくれてんのよ。

「つてあれえ？人間がいる。排除しなきゃ」

鳥羽の少女は人間（体はな）がいるのことに気づき、何故か右手の棒を俺の方に突き付けてくる。なぜに？

「ダメよお空。その人は私のお客様だから」

ぶつけられた頭が痛くて立ち上がれない俺を見て、若干楽しんでいる顔の悟り妖怪が助け舟を出してくれる。お空と呼ばれた少女は悟り妖怪の言葉を聞いて「そうなんだ」と言いながら筒をどける。

「ごめんね。わたしは霊鳥路空。お空って呼んでね」

「では、改めて私も。私は悟り妖怪の古明地さとりです」

『んじゃあ、俺だな。俺はかんざ……いや、俺の名はエボルトだ。』

一瞬神崎零夜の名を使おうかと考えたが、良く考えれば今俺は地底にいる。地底は地上で嫌われたもの達が集う場所。つまり零夜を知っている奴がいる可能性はない。

「エボルトさんですね。分かりました」

さしてさて、挨拶も済んだことだし、少し休みたいな。

『あとでみたらし団子でも奢ってやるよ。……零夜の金で』

「みたらし!? やったあ!!」

休ませてくれるお礼として、みたらし団子を奢る約束をする。最後の方はボソツで言う。ってか、お空めっちゃ嬉しそうだな。……つて、

『おい、抱きつくなよ』

「うにゆ〜えへへー」

「ころお空……すみませんエボルトさん」

何この状況。

「お空〜。報告終わった? 終わったたらみんなで……誰あんた? お空から離れて今すぐッ!」

またもや突然扉が開き、またもや俺の頭にぶつかる。そこから猫耳の赤毛少女が現れる。なにこれ、狙ってやってんの？そうなら流石の俺も怒るよ？

『俺はエボルト。こいつから抱きついてきてんのに……ってか、こいつら力強えなおい！』

必死に俺に抱きつくお空を話そうとするが中々離れない。それどころか抱きつく力が強まる。それに目の色変えた猫耳少女が俺の腕を握る。いや痛いよかなり。

「早く離れろ！」

『それはこのお空に言え！』

「あ、頭痛い」

なんかさとりが頭抱え始めた。

「あはははは。面白いね」

俺が呆れて困っている時、机の方から知っている声がする。そう、

俺をここに導いた少女の声だ。声の方を向けば、

『お前……誰だ?』

さとりと同じくサードアイを持ち、帽子を被った緑髪の少女が椅子に座っていた。サードアイはさとりとは違って閉じているが。

「あたしは古明地こいしー！無意識を操るんだよー」

「あ、こいしー！今までどこにいたの!？」

『いや、なんでもいいからこの二人をどうにかしてよ』

それで頑なに離れないお空にお憐が拗ね、冒頭に至るってわけだ。これを読んでるみんなもわけわかんないだろ?俺もわけわからん

『なあ、もうそろそろ離れてくんね?』

「うにゅ?分かった!」

ようやくお空が離れてくれたおかげで体が動かせる。ああー、体からボキッゴギッてなんか鳴っていけない音がしてる気がするんだが

……。

とある場所

「なるほど、ここが幻想郷か……お宝がいっぱいありそうだ」

突然出現したオーロラカーテンから一人の青年が現れる。茶色のジャケットに黒いシャツを着た青年は右手に持った銃のようなものを取り出すと、左手に持ったカードを装填する。そしてそれを上に向け、

「変身！」

引き金を引く。銃口から放たれた光がバーコードのようになり、青年の周りで人型の赤青緑の光が現れる。光は青年の周りで動き回っているが光が一つになると、青年の姿がその光と同じ姿になる。そして上にあつたバーコードが彼の顔に刺さると、体に青いラインがつく。

「さて、久しぶりに士に会っていくかな。幻想郷にいるはずだし」

そう言つて青年は……仮面ライダーディエンドは歩き始めた。

第四話 「零夜を知る鬼」

地底に来てから数日が経ち、俺の体（零夜のな）はだいぶ回復した。今の俺なら三回は仮面ライダーエボルに変身出来る。

俺が何故たった数日でここまで回復したかわかるかな？それは、この地霊殿にある温泉が関係している。地霊殿の温泉は傷や霊力、魔力などを回復させる効果があるらしく、長らくこの温泉に浸かっていた俺は、連戦続きでドライバーを使用し傷ついた体を簡単に回復させていった。流石の俺もこんな簡単に回復するとは思っていなかったがな。

ちなみに今日も朝から浸かっている。うん。地底ということもあつて、地面の下は溶岩だから結構暑い。

ん？

なんか俺の前に桜髪の少女がいる気がするんだが……気のせいでもいいのか？つてか、なんでお面を頭につけてんだ？

「お前……ここでは見ない顔だな」

いきなり話しかけてきた!?つてちよつと待って!?ここつて女湯?まさか混浴?!そもそも男湯なんてなかった説!?

「おい無視するな。無表情キャラって言われてる私でも悲しいぞ」

『知らねえよそんなもん。それよりお前誰だよ?』

「私か？私は秦こころ。お面の付喪神だ」

付喪神ねえ。お面のか……お面!?いや、この世界では神なんかもあるぐらいだし、お面の付喪神だっているわなあ……釈然としねえけどさ。

『俺はエボルト。ただの居候だ』

「ふむ？そうなのか。では、お前がこいしの言っていた男か」

こいつはどうやらこいしの友達みたいだな。まあなんだっていいが。

「さてと、私はもう上がるとしよう。お前も早めに上がることを強くオススメする。ここの温泉は人間には暑すぎるからな……博麗の巫女は別として、な」

こいつ今博麗の巫女を馬鹿にしなかった？俺の気のせい？

「そうそう、悟り妖怪の奴がお前を探していたぞ」

『そりゃあどうも』

その言葉を最後にこころは温泉から上がっていった。

『……俺も上がるかな』

温泉を満喫した俺は、さどりの部屋に向かっている。俺を探していたという事は、俺に用があるってことだからな。なんの用があるかは知らんが、面倒な事じゃなければいいがな。

「あ、探しましたよ。エボルトさん」

さどりの部屋に入ろうとしたら、後ろから声をかけられる。振り向くと案の定さどりがいた。

『俺を探していたって、さっきこころから聞いたが?』

「はい、そうなんですよ。ちよつと食料が切れちゃたので、調達をお願いしたいのです」

はあ?そんなことのために俺は呼ばれたのかよ。全く面倒な事ではないが、俺以外にいないのかよ。

「お空もお隣も今はいないので調達してくれる子がいないんです」

『こいしは……あの無意識フラフラ少女に頼めねえな』

「はい。だから貴方に頼みたくて」

『仕方ねえな。行つてやるよ。何が必要なんだ？』

あれからさとりに必要なものが書かれた紙を貰い、俺は旧地獄にある旧都に来ている。ここいらはかつて地上にいた鬼達がいるため、俺にとって居心地が悪い。俺が苦手とか嫌いとかではなく、単純にさとりから聞いた情報からあまり関わり合いになりたくがない。むしろ関わりたくない。

あちこちから興味的な視線を感じる。どれも好戦的な目だ。少しでも合わせたり話しかけたりしたり戦闘が起こりそうな予感がするな。

鬼は「勇気ある者、力強い者、正直な者」を好むと聞いた……あれ？俺真逆じゃね？俺最初から詰んだ？

「お、なんか人間がおるなあ？ここって人間がおる場所とちやうよなあ？」

なんか酔っ払いのガタイのいい黒鬼が絡んできたわ。これ本気で詰んだわ。鬼と戦うなら返信しないといけないからなあ。

「ん？よく見ればお前、零夜じゃないか!!」

『……………え?』

先程絡んできた黒鬼が俺の背中を叩きながら笑う。いや痛いって。

「まさか、鬼達の英雄様が帰ってきたなんてなあ!ま、お前は地上の人間だけだな!!俺様のことを覚えてるか?ガンギだよ!お前につけてもらった名だぜ?」

正直何言ってるかよくわかんなかった。何しろ俺が借りてるこいつの体は人間だ。記憶には鬼達と接していることは無かったはずだ。鬼は嘘を嫌う傾向があるから、だからこのガンギと名乗る鬼が嘘を言ってるはずがない。
どういうことだ?

「よし!早速勇儀さんに会わせなくちやなあ!」

そう言っつて黒鬼のガンギは俺の腕を掴むとずんずんと旧都を進ん

で広場に向かっていく。

ガンギに連れられ広場に來た俺は、物凄く居心地の悪い状況だった。今俺が変身できるのはブラッドスタークだけで、仮面ライダーエボルにはなれない。ブラッドスタークは基本ステータスが変わることがないため、仮面ライダーのように戦いの中で常に強化されていく訳では無い。つまり、万が一鬼と戦うことになれば、俺は瞬殺される。

「おい、どうしたんだ？随分と顔色悪いぜ」

「そ、そんな顔してるか？」

クソ！感情を手に入れた影響で少し恐怖心が芽生えたみたいだな。最悪だぜ全く。

「勇儀さーん!!零夜だぜ！神崎零夜がいたぜ！」

ガンギに連れられた俺は一つの店に入る。中は強い酒の匂いが漂っており、中に入るや否やガンギが奥の方に向けて大声をあげる。

する遠くの方から「なんだって!？」と声が聞こえた。

「おお、零夜じゃないか!!久しぶりだね。前にあったのは私が四天王をやめた時だね」

「零夜、覚えてるか？この人は鬼の四天王と呼ばれてた星熊勇儀さんだ！」

『お、おう』

あまりの迫力に思わず驚いてしまいました。
あーあ。これ完全面倒なことになったな！

第五話 「最強の鬼と新撰組の天才剣士」

あれから何があったか語ろうか？

四天王の一人である力の勇儀に連れられて酒場に來ているんだよ。どうして俺がこんな所に來なきゃならんのかねえ。全く。

断りづらい雰囲気してるから連れられてきたけどさ。いやそもそもあの力で腕掴まれてるのに逃げられるわけもないんだがな。

酒場の中は荒くれ者の鬼達が集う場所にしてはかなり綺麗でオシャレな場所だった。派手派手しいわけでもなく豪華すぎるわけでもなく、至って普通の酒場。カウンター席の奥には赤いコートのような服を着た白髪の青年が酒の入ったシェイカーを降っている。なんか様になってるなおい。絶対経験あるだらアイツ。

「よう！マスター！いつものくれ！」

店に入るなり勇儀が大声を張る。

「全く。少し静かにしたまえ。まあいいが。いつものカクテルだな？少し待っている」

赤い服の青年は自分が降っていたシェイカーを置き、別のシェイカーを取り出して酒を入れる。さっきの話からカクテルという酒を入れたのだろうか。

青年は素早い動きでシェイカーを降っていく。勇儀が俺の方を見てにかつて笑う。

「コイツはエミヤって言うらしいんだ。なんでも別世界では弓兵アーチャーと呼ばれてたらしいよ」

『へ、へえ。そうなのか』

そんなこと言われて俺にどう反応しろというのだこいつは！いくらなんでもいきなり言われてすぐ反応出来るやつはかなり少ないぞこら！

「なんか反応薄いなあ。以前会った時の零夜なら何らかの反応は見せてくれるんだが……」

いや無茶言うな!!以前の零夜がどんな感じだったのかはともかく、今は地球外生命の俺が使っているんだぞ?分かるわけねえだろ!

「おかしいなあ。昔のお前は『別世界』という言葉が大好きだったのになあ。まるで別の誰かが憑依しているみたいな感覚だな?」

鬼は嘘を嫌う。それはこの世界では常識に入る。だからこそだろうなあ。

「全く……いつまで零夜のフリをしているつもりだい?」

その瞬間、俺の体は痛みと共に店の外に吹き飛ばされていた。ほんの一瞬のことだったため、変身していない俺に対処する手段はなかったが、確実に勇儀が何をしたのかはわかった。

俺は殴られたのだ。勇儀に。目にも止まらぬ早さでな。

咄嗟に後ろに跳んだから衝撃は店の外に飛ばされるだけで済んだが、何もしていなかったら全身骨折は絶対にしていたと思うなこれ。既に当たってしまった左手がビリビリしてるからな。

「へえ、よく避けたね。大体のやつは今ので死んじゃうんだけどな」

ある意味褒められているのかわからない言葉を吐きながら勇儀が店から出てくる。ってか、よく見たら店の一部がぶっ壊れてるじゃんかよ。なんちゆう力してんだよ。

地底にいる妖怪の情報は記憶としてなかったから対処し辛いのが悲しいところだな。

「さて、次は本気で当てるよっ。」

あはははは！今ので本気じゃなかっただど？ふざけるなよ！お前からみたいなキチガイなバケモノなんか相手したくないんだよ（↑ブーメラン）！！

というわけで逃げたいので後ろを振り向くと、もう既に鬼たちによつて囲まれていたわ。あ、無理だわこれ。

『やれやれ、面倒なことは嫌いなんだがなあ……』

そう言つて俺はエボルドライバーを取り出し腰に装着する。そして二つのボトルを取り出すとエボルドライバーに装填する。

【コブラ！ライダーシステム！エボリューション！】

ドライバーから靄のかかったような状態のハーフボディが形成され、俺の周りをグルグルと回り出す。

【Are you ready?】

準備は出来てるか？そう聞いてくるドライバーに俺は両手を胸の前で交差させ、こう答える。

『変身！』

先程までグルグルと回っていたハーフボディが俺の体に合体するようにくつつき、ハーフボディにかかっていた靄が吹き飛ぶように消え去る。その際に仮面ライダーエボルに変身した俺の体から衝撃波が放たれる。

『エボル、フェーズ1』

「ハハっ！いいねいいね!!アンタ最高だよ!まさかそんなのを隠してたなんてね!」

俺が変身した直後に勇儀が殴りかかってくる。既の所で躲した俺は、正直に言つて「マジかよ」と思った。なぜなら、

勇儀の放った拳の風圧で五店ぐらい吹き飛んだからさ!!

……何人が鬼が飛んでつたけど大丈夫かあれ?

『あーあ。派手にやったな』

「ふん。この旧都では喧嘩で家一つ吹き飛ぶなんざ常識だよ」

『そんな常識なんざ捨てちまえ!』

またもや風圧が飛んできた。つたく。

【エボルテックファイニッシュ!チャオ〜】

エボルドライバーのレバーを勢いよく回し、右手にエネルギーを溜める。勇儀がこちらに迫ってきた所にカウンターお見舞いしてやる。

「いいね！何をするつもりなのかはわかるがここで引いたら鬼の名が廃る！行くぞ！」

四天王奥義 「三步必殺」!!

突然勇儀が纏っていた雰囲気ガラリと変わる。その様子に鬼達が口々に「や、やべえぞ！」「勇儀の姐さん、あの技を使うつもりだ！」「ああ！また旧都の家を修理しなくちゃ！」とボヤきながら逃げていく。正々堂々を好む鬼が逃げていいのか？

「全く鬼の癖に逃げるなんてねえ」

！
そう言いながらニヤリとしてるがね、ほとんどお前のせいだからな

勇儀が一步を踏み出す。その瞬間地面が揺れ出す。二歩目で地面にヒビが入る。三歩目で勇儀は俺に向けて拳を突き出す。

俺はそれに合わせて右手に溜め込んだエネルギーを勇儀に向けて放つ。

勇儀のエネルギーと俺のエネルギーがぶつかり合い、凄まじい衝撃

波が巻き起こる。なんかやばい気がしてきたなこれ。

エネルギー同士のぶつかり合いで爆発が置き、辺り一面煙で見えなくなる。煙が晴れた瞬間に奴に特大の攻撃をしてやる。

「おうらあー！」

だが俺の予想を超えて煙の中から勇儀が殴りかかってきた。流石の俺も驚いたが、咄嗟に体を捻って攻撃を躲しカウンターをする。俺の蹴りが脇腹に当たった勇儀は大きく吹き飛ぶがそこまでダメージが通っているように見えない。

俺と勇儀が瞬間的な速さで迫り合い拳を突き出そうとする。

ヒュン！

俺と勇儀の目の前に刀と双剣が迫っていた。

「なんのつもりだい？」

勇儀が殺し^{喧嘩}合い^{喧嘩}を邪魔した赤コートの青年と青い羽織を羽織った少女を睨む。

「何のつもりもない。派手に店を壊してくれたな。お前達が喧嘩する度に一体誰が壊された店の修理代を河童達に払っていると思ってるんだ？」

「そうですねよ！沖田さん行きつけの甘味屋さんが潰れちゃったじゃないですか!! 一体何回目ですか!!」

「いや、そういう話をしているんじゃないのだがね……まあいい。とにかくだ！壊した店ぐらい自分達で修理しに行け！ついでに壊した家の奴らに謝りに行け！」

謝るのはついででいいのかよ！

「ああ、分かったよ。済まないね。ついカツとなっちまった」

なにやら收拾がついたみたいだから変身をといた俺の元に、先程の青い羽織を羽織った少女がやってきた。

「エボルトさんですね。話はさとりさんから伺っています。私は新選組一番隊長沖田おきた総司そうじと申します」

『お、おう。そうか』

なんか初めて礼儀正しい奴に会った気がする。そう思った束の間、俺はガシツと総司によって腕を掴まれていた。

「では、行きましようか」

『え?』

「え?じゃないですよ!貴方も勇儀さんと同じく甘味屋を……家を壊した原因なんですから責任はとってもらわないと」

よつぽど甘味屋が壊されたのが堪えたのか、額に青筋が立っていた。あー、俺今日死んだわ絶対。

一方その頃

「では、お前も行くぞ勇儀」

「……マジかよ」

勇儀は勇儀でエミヤによって腕を掴まれていた。

第六話 「襲撃者」

あーあア、とても憂鬱だ。今の俺の姿を、かつて戦った戦兔達が見たら驚いてしまうだろうア。

あア？何故かって？

今壊した家にの主に誤りに行ってるからだよ!!勇儀となア!!

喧嘩売られて買ってやったら家壊しちまって、エミヤに（ほぼ強制的に）連れられた勇儀と、総司に（こちらもほぼ強制的に）連れられた俺が、壊された家主に謝りに行っている。流石に逃げ出すことも出来ないの俺にしては非常に珍しく謝りに来ているとわけだ。

いや、謝ったことはあるぜ？謝ることが余りないだけで。

「さて、謝礼も済んだところで、私はバーに戻るとしよう。君達、もうこのようなことを引き起こさないでくれ」

「それではー」

そうやって二人は帰っていった。幻想郷では常識にとらわれてはいけない。今日感じた教訓だった。

『はあ………で？どうするんだ？まだやるって言うのか？』

「いや、いいよ。なんか喧嘩する気も起きなくなった」

だろうな、と俺は呟く。まあ、これ以上続けるのは俺としても良くないしなア。ただえさえ今変身できる回数が決められてるのに、これ以上変身したくない。

『はあ、やれやれ。俺は地霊殿に戻るが……お前はどする？』

「私は帰るよ。なんか、もう疲れたし」

お互い別れを告げて、俺は地霊殿に戻る。だが、すぐに勇儀の肩を掴んだ。

「なんだい？……どうしたって……ッ!？」

肩を掴まれた勇儀が俺の方を向いたと同時に、俺が見ている方向を見て絶句する。それは何故か？

地霊殿が燃えながら黒煙を上げているからだ。

「こりやあヤバいねえ。さとり達が心配だ！行くよ！」

『わかってらァ』

俺と勇儀は急いで地霊殿に向けて走る。ああ、面倒なことが起こりそうだ。

くここにきてさとり目線く

私の名は古明地さとりと言います。この地霊殿にて管理者のよう
な事をやっています。書類の破棄をやっていました。

「ふう……もうお昼時ですか。もうすぐエボルトさんも帰ってくるだ
ろうし、お昼ご飯の用意でもしますか」

そう言つて私は立ち上がり、食堂にある厨房に向かいました。ですが向かつている途中に異変に気づきます。

なにかが焼けているようなそんな匂いがしたんです。急いで匂いの場所に向かうと、そこには黒い陰陽服をきた男性が式神を引き連れながら妖怪達と共に地霊殿を攻撃していました。

「貴方達！地霊殿に何しているんですか!!」

私の声に陰陽師の男性が私を見ます。

「なについて……見ての通りだが？この地底に住む邪悪な妖怪である貴様らを滅ぼす為にな！」

「滅ぼすって……一体なぜ」

陰陽師は心底呆れたように肩をすくめ、私に向けてお祓い棒を突きつけます。

「古明地さとり……貴様のその能力は貴様が持つには適していない。世界のために戦う我ら陰陽師にこそ相応しいもの。よつて貴様を滅し、その能力頂戴頂こう」

私に向けられたお祓い棒から無数の弾幕が飛び散り、急いで奥に逃

げ出します。私は妖怪の中でも極力弱いほうです。力業なら人間にも負けます。私が今までここにいられたのは私の能力である『心を読む程度の能力』のおかげと言っても過言ではありません。

「はあ、はあ、はあ」

急いで事務室に逃げ込んだ私は、扉の鍵を閉め扉やらなんやらで厳重に開かないようにします。ですが、見ただけで感じられたあの雰囲気から察するに、あの陰陽師はかなりの実力者であることがわかります。

すぐに扉は開けられ邪魔していた机などは何故か陰陽師に従っている妖怪達が斬り伏せます。

「ふむ、案外簡単に見つかったな。やれ」

心になにか術式を組み込んでいるのか、陰陽師の心が全く読めず、神速に近い速度で近づいてきた妖怪に殴り飛ばされ、そのまま壁を壊して外に出てしまいました。

「くう……所々痛いですね」

そう言いながらも逃げるために立ち上がろうとした私の髪を、妖怪が掴み私を中に浮かせます。

「ふむ、こんな簡単に捕まえられるとはな。妖怪達が噂していた『古明地さとりは力が弱い』というのも納得がいけるな」

そう言つて何やら御札を取り出した陰陽師は、札を私の体に貼り付けます。そして印を唱えた瞬間。

「ああ、あああああああああああああああああ!!」

御札から電撃が放出され、私の体を痺れさせます。痺れた私を妖怪が殴り、また電撃が私を襲います。妖怪はなにか操られているかのよう目虚ろであり、私が電撃に襲われている間も、容赦なく殴りつけてきます。

「ふん、これぐらいいいだろう」

妖怪が掴んでいた髪から手を離し、痺れて動けない私の服を強引に脱がし破き始めました。

「な、なにを……」

その動作から何をしようとしているのかを察した私の頬が若干赤くなり、思わず陰陽師を睨み付けます。その態度が気に触ったのか、陰陽師はまた印を唱えます。

私はまた絶叫し、体の至る所が痺れて辛くなります。

「早くやれ。使えない妖怪共よ。簡単に滅するより、コイツら妖怪が犯されるがいい」

あまりにも外道のような事を吐く陰陽師は、私と妖怪から少し離れたところに向かいこちらの様子を眺めます。

「いや、いやあ」

涙を流しながら私は必死に抵抗しようとしてはいますが、体が痺れて何も出来ない私に妖怪達は履いていたズボンを脱ぎだします。

「いやーだ、誰か……」

私の心が壊れそうになり目を瞑ったその時、

エボルテックファイニッシュ！チャオ！

そんな音が聞こえ、私を囲っていた妖怪達が爆発し、私は誰かに抱えられながらどこかに移動しました。私が目を開くと、

『やってくれたなア……人間。覚悟はできてんだろっうなア!!』

とても怒った雰囲気のエボルトさんがコブラを思わせる赤い鎧のようなものを纏っていました。すぐ近くには勇儀さんもいて、陰陽師の方を睨みつけています。

「全く……人間ってのはどこまでも腐っているねえ」

勇儀さんもとても激怒しているようで、手首をボキツと鳴らしながら構えます。

『しばらく休んでな。なあに、すぐに終わるさ』

エボルトさんは私を安全そうな場所に下ろし、頭を撫でると、すぐに陰陽師の方に歩きだします。

すぐさま殴りかかろうとした勇儀さんを、エボルトさんが手で制します。

「なんのつもりだい？ 私は今すぐにでもこの外道を殴り殺したいんだが？」

勇儀が怒鳴りながら言いますが、エボルトさんを見てすぐに黙ります。

『勇儀、コイツには手を出すな！コイツは……俺が殺す』

エボルトさんはそう言って陰陽師に向かって蹴りを放ちました。

第七話 「怒りのままに」

今の俺はかつてないほど激怒していた。ビルドの世界で最終決戦を行うまでに俺は色々な人間達の欲望を見てきた。パンドラボックスから放たれる光を浴びて欲望に忠実になった人間……あれば俺が意図的に引き起こしたものだからノーカンとして、ここまで醜い欲望の持ち主は俺は見た事がない。

人間というのは醜い。欲望に忠実に生き、自分こそが強者だと勘違いしながら生きている。かつて俺が滅ぼした火星に残されたパンドラボックスを見つけた宇宙飛行士石動惣一に憑依し、一番近くで人間というのを観察していた俺だからこそわかる。

人間共と触れ合い美というのを知った俺は、やはり人間こそが地球上で一番生活に相応しくない生物だと判断した。だから一度は地球も滅ぼすとした。だが、俺が造りあげた偽の正義のヒーロー仮面ライダービルド達の姿を見て、俺は考えを改め欲望渦巻く人間達が自分から滅びるように仕向けた。それでもやはりと言うべきか、戦兎達は俺に立ち向かいたった一人になろうとも仲間との絆を信じて俺に全力をぶつけてきた。

俺が唯一認めた人間の強みが絆。強大な敵に大して、ビルドは最初の基本フォームラビット坦克の姿になっても諦めなかったからだ。

そんな姿を知ってるからこそ、今日の前にいる黒い陰陽服を着た陰陽師が許せなかった。だが同時になるほどなとも思った。鬼は嘘を嫌う。その理由が俺にも理解出来た。

『さアて、地霊殿に手を出したんだ……このまま生きて帰れると思っ
てないよなア？』

一歩踏み出す度に、奴は顔を青ざめて後ずさる。それを見て腹にイ

ラつく。

『おいおい？さっきまでの威勢はどうした？妖怪相手なら強者でいられると思っていたのか？』

顔面蒼白にしながらマヌケにもブルブル震える陰陽師の首を左手で掴み持ち上げる。

『自分だけが特別な力を持っていると思ってたのか？だったらそれとはとんだ勘違いってもんだア。世の中お前程度の力なんざ幾らでもある。自分の力に溺れて粹がるのはいいが……もうちつと考えてから来るべきだったなア？』

右手でエボルドライバーのレバーを勢いよく回し、掴んでいた首から手を離す。

〔エボルテックファイニッシュ！チャオ！〕

首を離された陰陽師の腹を、エネルギーを溜め込んだ左足で蹴り上げ、そこからまた左足で踵落としを食らわせる。その衝撃で地面にめり込んだ陰陽師の口から血が飛び散るが関係ない。

「か、かはあ……！」

地面に倒れて動けない腹に思いつきり足で踏んずけグリグリと挟
る。

「あ、ああああああああ!!や、やめてくれええええええ!!」

『そう言うけどよオ、お前……今までその手にかけてきた妖怪達から
そう言われてやめたことがあったのか?いや、無いな。だったら俺が
止めるはずないだろオ?』

もういちどエボルドライバーのレバーを勢いよく回す。

【エボルテックファイニッシュ!チャオ!】

地面にめり込んだままの陰陽師を思いつきり蹴り飛ばすと、飛ばさ
れた陰陽師は爆発しこの世を去った。

『フーン!汚え花火だ!』

「それ猿人王子のセリフでは?」

『いいんだよ別に』

さりげなくツツコミを入れてくるさとりに文句を言いつつエボルドライバーからコブラエボルボトルとライダーエボルボトルを抜いた俺は零夜の姿に戻り、さとりの容態を見る。

ずっと付き添ってくれていたのか、勇儀がさつきからさとりのことを心配そうに見ている。

『……体の調子は悪くないようだな。見た感じだと電撃の受け過ぎで少し体の血管が麻痺してるところがあるが、まあこれについてはそのうち治る』

「それは聞いて安心したよ。はぁーよかったよよかった！エボルトが気付けてくれなかったから危険な状態になっていただろうよ」

おいおい、余計なこと言うなよ。

「そうなんですか？」

ほら見ろおー。さとりもなんか頬を赤らめてこっち見てんじやねーか。つたく……こういうのは俺のしように合わねえってんだよ。

『まあ、そうだな。いざ帰ろうかと思ったら地霊殿から煙が出てんだ。心配しない方がおかしいだろ？』

「そう、ですね。ありがとうございます」

『ふん、勘違いするな。俺は体を休ませてもらった恩を返したただけだ』

微笑んださとりから逃げるようにそっぽを向いて呟く。近くで「正直じゃないねえ……」って言ってる勇儀よ、また後で俺と喧嘩するか？ ブラックホールフォームで片付けてもいいんだぜ？ ドラゴンエボルトがいないからそこまでのフェーズにまずなれないし、第一段階としてエボルトリガーを修復しないといけねえからブラックホールフォームに変身出来ないけどな！

『まったく仕方ねえな！俺が今から朝食作ってやるよ！ついでにコーヒーも飲ませてやる！勇儀、お前も来るか？』

「お！いいじゃないか！ぜひとも行かせてもらおうか！」

「エボルトさんの手料理やコーヒーは初めてですね！楽しみです！」

三人で笑いながら地霊殿の中に入っていく。

戦兎……お前は間違ってたなかつた。お前の信じた絆は、俺の中にずっと残っているぜ？

お・ま・け!!

「ぶほお！何このコーヒー！かなり不味すぎじゃないかい！」

「料理は美味しいのに、このコーヒーはちよつと……できれば言いたくはないのですが不味いですね」

『だああああクソがああああ!!なんで上手くいかねえ!ブラッド族はコーヒーを不味く作る才能でもあるつて言いてえのかコンチクショウ!!』

いつでも平和な地霊殿出会った。

第三章・解き放たれた異変の脅威

第一話「動き出す蒼き怪盗」

薄暗い天気の中、博麗神社から帰ってきたレミリアは、ある一つの運命を見た。だが、それはありえないこと。なぜならレミリアの見た運命はまだ遭遇した事のない人物である仮面ライダーエボルについてだからだ。

レミリアが見た運命の中では、エボルトがさとりを救うために異次元に向かう所。かつて世界の破壊者と呼ばれた男門矢士の開いたオーロラカーテンで異次元の世界に向かったのだ。その時の姿はコブラのような見た目をした白いアーマーを着ていた。

『本当にいいんだな？これを通れば何かあるかわからないぞ？』

『いいんだよ。俺が■した■の■■だからよ』

『そこまで言うなら俺はもう止めない。あっちにはもう■■が居るはずだ。直ぐに合流しろよ？』

わかっているよとボヤきながらエボルトはオーロラカーテンの中に入っていく、そこからは運命が途切れてしまったため見ることは叶わなかった。だが、確実に良くないことが起きることだけはレミリアにはわかった。

この事は紅魔館の実力者全員には話しており、みんなが知ってる事だ(フランは「またお姉様が妄言言ってる」とジト目で呟いていたが)。

そんなことがあって現在不貞腐れているレミリアは綺麗な庭を眺めながら紅茶を飲んでいた。その時、不穏な気配を感じとった。まだまだ遠くにある気配だが確実にこちらに向けて殺意が放たれている。

「ふん。どこの誰だが知らんが、紅魔館にそのような殺意を向けられては現当主としても黙ってはおれんな」

ティーカップをさらに戻し立ち上がると、翼を広げて庭に出る。それと同時に自分の隣に咲夜が現れ日傘をさしながら佇む。

チラツと咲夜の方を見れば、何事もないように見えるその姿だが、レミリアにはわかる。その視線が殺意の方向を睨んでいるのを。

「お出かけですか？」

「ええ、そうよ。少し身の程を弁えない奴らに、ね？」

「お供します」

相変わらずの咲夜を見てニヤツと笑うと、カリスマ感全開のレミリアは気分よく飛び立つ。門の方ではこれまた非常に珍しく美鈴が瞼を瞑って壁を背を預けて腕組みしながらも、殺意の方向を油断なく構えていた。

「珍しいじゃないか？美鈴？」

近くに降り立って訪ねる。

美鈴は片目だけ開け、

「これほどの殺意を向けられては寝てられませんよ」

少し緊張した声音で返した。

寝てられないという単語と態度に咲夜がナイフを投げそうになったが、手で制すだけでレミアが止める。いつものように優雅でありながらカリスマ溢れるその仕草に咲夜は鼻から忠誠の象徴を出しそうになるのを堪える。

そんなことしても美鈴には「気」でバレてしまっているので苦笑いされているが。

く人里近くく

紅魔館に向けて殺意を放ちながら歩き出している怪人達を見て、たまたま通りかかった妹紅は驚愕する。自分らがいつも相手しているのとは違う完全なる異形の姿を見た為だ。

「なんだアイツら……あの殺意の量は？」

尋常じゃないその雰囲気は圧倒されながらも止めなくてはならないと、両手に炎を出して突撃しようとした。だが、突然肩を掴まれたことによりそれは出来ずに終わる。

「な、なんだ!?!……って、お前誰だよ!?!」

肩を掴んでいた方を振り向くと、青を基調としたアーマーに包まれた顔にバーコードの刺さった男が立っていた。

『ただの通りすがりの仮面ライダーさ。覚えておきたまえ。それと、彼らの相手は僕に任せてくれないか?』

「はあ!?!そんなこと言ってる場合じゃないだろ!」

『まあまあそう言わずに！』

掴みどころのない雰囲気の方が、指先でクルクルと銃を回し、左手に持ったカードを装填する。

【カメンライド】

そしてその銃口を怪人たちの目の前に向け引き金を引く。

【ブレイド】

【響鬼】

【ドレイク】

【ライオトルーパー】

【電王】

【イクサ】

銃口から放たれた光が怪人たちの前で何重にも重なり合い、怪人たちの動きを止める。やがて光が人の形になり五人十三人のライオトルーパーの仮面ライダーが現れる。

「な、なんだアイツら!? 士の言う仮面ライダーって奴らか?」

『よく知ってるね? 士のことも知ってるようだし、後で話し聞かせてもらおうか』

妹紅が少し目を離した隙に、先程の男は何処にいなかった。だが、妹紅の耳に聞こえた『僕は仮面ライダーディエンド。覚えておきたまえ』という声から、彼も仮面ライダーだと言うことを知った。

「まさか、ディケイドに続き、ディエンドまで現れるとは……やはり貴様のいる世界は破壊されてしまうようだな! おのれディケイドオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

マヨイガ

「……ッ!?」ゾワッ

「どうしたのかしら?」

「なんか懐かしい嫌な奴の声が聞こえた気がした」

「は、はあ……?」

士がお世話になってるマヨイガでそんなことがあつとか

第二話 「亡き王女が愛する人」

私は今咲夜と共に殺意の向かってくる方向に飛んでいる。この殺意は尋常じゃないほどの力強さがある。現に咲夜は少し顔が青い。私の種族が吸血鬼でよかった。

「なにこれ……？」

人外近くまでやってきた私達は、目の前で起きていることに驚愕していた。

幻想郷に存在する妖怪とはまた違う姿をした異形の怪物達が、アーマーやマスクを装着した仮面ライダー達と戦っていた。自称仮面ライダーオタクの早苗なら名前が全部分かるところだが、生憎と私が知っているライダーは二人しかいない。

「お嬢様、どうされますか？」

「そうね。まさかこんなにも仮面ライダーがいるとは思わなかったけど、私たちも加勢しに行くわよ！」

そうやって私が太陽の下でも活動出来るに魔術を使用しようとした時、突然地上からカラフルなレーザー弾が飛んでくる。

そしていつの間にか私は咲夜に抱き抱えられながら地上に降り立つ。私目掛けて弾を撃ってきた方を見れば、基本カラーが青い色の仮面ライダーが私に向けて銃口を突きつけていた。

その仮面ライダーを見た時、私の脳内に昔聞いた土の言葉が思い出される。

『レミリア。もしもなんだが』

『なによ?』

『俺の変身する仮面ライダーに似ている青いライダーに出会ったら注意しとけ。やつは強いからな』

『そうなの?..』

『ああ、それに奴はもしかしたら俺より強いかもしれん』

『そんなに?』

『ああ、いいか?絶対に油断するなよ?やつの名は……』

「仮面ライダーディエンド……」

士から聞いていた名を思い出した私は思わずその名を呟く。するとディエンドは意外そうな雰囲気醸し出す。

『驚いたなあ。まさか、僕のことを知ってるなんて』

「あまり夜の王を舐めないでもらいたいな。お前の事などつくに知っている」

あまり興味無さそうに聞いているディエンドはへえーって声を出すが、気づいた時には目の前に銃口が見えた。

『でも、士から聞いたんだろ?』

また咲夜が私を抱きながら能力で避ける。咲夜の能力は時を止める。これはかなり強い能力ではあるが、ちゃんと欠点もある。

『今のを避けるとはね……』

デイエンドが驚いた声を上げる。

「ご覧の通り、種も仕掛けもございませんよ?」

『でもまあ……どうせ時止めたんだろ?』

たった一瞬、それもたった一度見ただけで咲夜の能力を看破した所から士の言っていたデイエンドの実力は本物と見ていいわね。

「咲夜……貴女は霊夢のところに向かいなさい!ここは私一人でやるから!」

私の言葉を聞き咲夜が驚いたように慌てる。だが、咲夜は何かを察してくれたのか、私に日傘を持たせてその場から消える。恐らく能力を使って霊夢のところに向かったのだろうな。

『ふむ……蝙蝠か。ならこれがいいかな?』

私に向けて何度何度もレーザー弾を撃っていたデイエンドは、突然私の方を見て一枚のカードをデイエンドライバーに装填する。

【カメンライド】

そしてその銃口を私に向けるとニヤッとしたような雰囲気が出た。デイエンドは引き金を引く。

【キバ】

銃口から放たれた光が人の形になり、蝙蝠をモチーフにした姿になる。その人は私たちに向かって走りながら光を振り払う。

そしてその姿を見た瞬間、私の中で絶望感が増幅した。何せもう会うことの出来ない人の姿だから。

蝙蝠の羽のような黄色に複眼。赤を基調としたそのアーマーに白い拘束具が取り付けられている。

仮面ライダーキバ

通常フォーム。

その姿を見てショックを受けた私は、一瞬だけ動きが止まってしまっていた。

「どうして……？どうしてなの？どうして貴方がそこにいる？答えて！渡ッ！」

悲鳴にも似た声をかけてもまるで人間味がなくなったかのように、キバは私達に攻撃を開始する。私は翼を広げて空へ逃げる。

空を自由自在に飛べる私達とは違い、仮面ライダーとは例外を除きほとんどが地上戦で戦うのが多い。だから空へ逃げれば済むと思っていた。でも私は忘れていた。

【バツシャーマグナム】

私たちの様子を見て緑色の笛をキバットバットⅢ世に噛ませる。その後どこからともなく現れたバツシャーマグナムを手取る。

バツシャーマグナムを手を取った瞬間、キバの複眼と右腕、胸の赤い部分、キバットの目が緑色に変化する。

そうだった。奴にはフエッスルと呼ばれるアイテムを使うことで、それに秘められた能力を使うことが出来る。キバの特徴は赤いフエッスルと黄色いフエッスル、そして、三本のフエッスルが存在する（あと一本あった気がするが忘れた）。そのうちの緑色のフエッスルは水の力を秘めたマーマン族の力がある。水の力と遠隔攻撃を得意としたその戦法は、水を弱点とする我ら吸血鬼には効果抜群。

「……ヤバいな」

冷や汗を描きながらそう呟くが、まるで機械のように私に銃口を向

けるキバを見て少し悲しくなる。

せつかく会えたというのに相手は召喚されただけの別人で、私は見た目だけとはいえ最愛の人と殺しあわなければならぬというのか……はは、悲劇とはまさにこのような場面で使うものなのかもな。

『さて、では面倒な吸血鬼には退場願おうか?』

ディエンドがそう言いながら一枚のカードをディエンドドライバーに装填すると、キバに向けて引き金を引く。

「ファイナルアタックライド……キキキキバ」

キバはバツシャーマグナムに溜め込んだ水のエネルギーを私に向けて撃つ。水の球体が私目掛けて高速で迫り来る。そして恐らくホーミング機能がついていると思うから避けることも出来ない。

どうしたらいいの!!

でも、キバに殺されるのならいいのかもしれないな。渡は優しい。同族にも仲間にも。そして家族にも。兄の為に自らファンガイアの王となると聞いた時はびつくりしたし、私は嬉しかった。でも寂しかった。1人ですべてを終わらせようとする彼の顔を見るのが辛かった。

もういいよね? 渡……。そう心の中で思いながら私は瞼を瞑った。

ただどいくら待っても私に水が当たることは無かった。むしろ誰かに抱かれられていた。お姫様抱っこで。何かおかしいと感じた私が目を開けると……

「まさか、またここに帰ってくるとは思わなかったよ」

白いシャツにブルージーンズを着て、白いスカーフを巻いた好青年がいた。

彼の姿を見て、私は目に大量の雫が溜め込んで来るのがわかる。

「遅くなってごめんね？まさか僕の仲間たちまでこの世界に連れてくるなんて……土さんのやることは驚くばかりだよ」

『ホントになあー』

やれやれと言った風のため息を吐く渡に便乗するように黄色い蝙蝠が飛んでくる。

「ここから僕達に任せて」

そういう彼は男らしくて頼りがいがあった別れる前よりも好きになってしまう。私の心がキュンとなってしまう。

私を見て微笑んでくれた彼は、私を安全そうな場所に下ろすと、召喚されたキバとディエンドを睨みつける。

「ディエンド……今から僕の仲間達が、貴方の目的を終わらせてます……キバット!!」

かつて世界の破壊者に言ったセリフを少し変えて叫ぶ。その際に右手を上に掲げ、『ギバって行くぜー!』と飛んでくるキバットを掴む。キバットを顔のあたりまで持つてくると、キバットの口に左手を添える。

『ガブリッ!』

キバットが渡の左手を噛んだ直後に彼の腰に鎖が現れ、キバツクルに蝙蝠が木枝に休むような感じでキバットが収まる。

すると彼の姿が目の前のキバと同じ姿に変身するが、直ぐに黄色のフエッスル……タツロットフエッスルを掴みキバットに吹かせる。

するとどこからともなく『ビューンビューンフォルテツシモ!』と叫びながら小さな竜魔皇竜タツロットが飛んでくると、『変身!』と言いながらキバのカナテ（鎖）を断ち切りるとキバの左腕に収まる。

キバの鎧からエンペラーキバの鎧へと変化すると、最後にドラゴンをイメージした紅いマントを靡かせる。

「か、カッコいい……」

仮面ライダーキバの最強の姿が今、この幻想なる世界にて降臨した。

第三話「Absolute・Builder」

赤いマントを靡かせながら優雅に迫るキバは、手にしたザンバットソードで一瞬で召喚されたキバを斬り伏せた。その強さはレミリアが最後に戦い別れた時よりも数段強い。

レミリアは仮面ライダーキバ……紅渡の事が好きである。それこそレミリアの父スカーレット卿が発狂しそうなほど……いや発狂してたわ。

自分の召喚したキバがあっさり倒されたのを見ても、むしろ当たり前と言った雰囲気を出すデイエンド。

『流石だね。ファンガイアの王を倒しただけはある』

『僕一人で倒したわけではないけどね』

お互い油断なく警戒し、武器を構える。キバがザンバットソードで斬りかかればデイエンドライダーで応戦し、デイエンドがデイエンドライダーで撃てばザンバットソードでレーザー弾を斬って弾く。

レミリアはその光景をただ黙って見ているだけしかできない。怪人の大軍を見れば士が呼び寄せたライダー達が戦っている。

クウガからエグゼイドまでの仮面ライダーが自分たちがこれまで倒してきた怪人たちと戦っている。その中にはかつてキバが過去で父音也が変身したダークキバと、そして現在で兄大河が変身したダークキバと共に倒したバットファンガイアがいた。

キバはそれを見るとデイエンドには目もくれずバットファンガイアに向けて走り去っていく。一人残されたレミリアは恐る恐るデイエンドを見るが、デイエンドはもう戦う意思がないのかこちらには見

向きもしなかった。

『なるほど……士の奴、考えたね』

何故か嬉しそうなデイエンドに若干引きつつも、彼が呟いた一言に体の芯が凍りついた。

『さて、八雲紫の呼び出した怪人達は彼らに任せるとして、僕は僕で幻想郷のお宝を頂くとしよう』

「ど、という事だ!!紫が呼び出した、だと?」

信じたくない、そういった感情がただ漏れの状態でデイエンドに詰め寄る。先程までの恐怖心はどこいったのか分からないが、少なくとも今の状態に恐怖心は皆無である。

そんなレミリアの様子に少し呆れたような感じになる。

『知らなかったのかい?』

「し、知ってるわけじゃない!!それにこの幻想郷で一番幻想郷を愛しているのはあの紫よ?その本人がどうしてそんなことをするのよー。」

『それは僕に言われてもわからないな。まあ。なにか目的があるんじゃないかな？もつとも、これだけのラスボスレベルの怪人達を呼び寄せたところを見るに、僕の前に現れた八雲紫はこの幻想郷を壊そうとしているように見えたね』

明らかに興味無さそうに言うデイエンドは、自分の背後に士と同じオーロラカーテンを出現させ、その中に入っていく。それと同時にデイエンドが召喚したライダー達も消滅した。

「い、一体どういうことなの?！」

訳が分からずそう呟くことしか今のレミリアには出来なかった。

エンペラーキバがライダー達に加わってすぐのこと、キバとデイケ

イドを除いた平成ライダー全員が最終形態に入った。

仮面ライダークウガアルティメット

仮面ライダーアギトシャイニングフォーム

仮面ライダー龍騎サバイブ

仮面ライダーファイズブラスターフォーム

仮面ライダーブレイドキングフォーム

仮面ライダー響鬼装甲響鬼

仮面ライダーカブトハイパーフォーム

仮面ライダー電王クライマックスフォーム

仮面ライダーダブルサイクロンジョーカーエクストリーム

仮面ライダーオーズプロティラコンボ

仮面ライダーフォーゼコスミックステイツ

仮面ライダーウィザードインフィニティスタイル

仮面ライダードライブタイプライドロン

仮面ライダーゴーストムゲン魂

仮面ライダーエグゼイドムテキゲーマー

全てのライダーが最強の姿となり全ての怪人達を撃破することに成功した。士によってこの幻想郷に連れてこられたライダー達はこのあとどうするかを話し合っていた。

「ん？あれって……戦兔？戦兔じゃないか!？」

怪人達を倒し終えた自分達に向かって歩いてくる青年にいち早く気づいたエグゼイドが嬉しそうに声を上げる。だが、すぐに何かおかしいことに気づいた。

戦兔はまるで感情がなくなっただんじやないかって思えるような無表情であり、もう敵とないというのにビルドドライバーを腰に装着する。すると、赤と青のフルボトルと黒いフルボトルを取り出し数回振るとドライバーに差し込んだ。

「ラビットタンク！アブソリユート！ベストマッチ！」

ビルドドライバーにあるレバーを回す。

「Are you ready？」

「……変身」

抑揚のない声でただ呟くように言うと、地面から黒いマグマのような闇が溢れ出し霜のかかったハーフボディが精製される。それが戦兎に重なることで一つとなり、霜のような物が吹き飛ぶ。

霜のようなものが吹き飛んだあと周囲に凄まじい衝撃波が放たれ、近くにいたエグゼイド達は遠くに吹き飛ばされてしまった。

「最強無敵の絶対王者！強制の創造者！やべ〜い！すげ〜い！逆らえねえ〜！アブソリユート〜ビィィィルドオオオオオオ」

黒いスーツに白いアーマープレートのビルドはいつものビルドではなかった。

「勝利の法則は既に決まっている」

そう呟いたアブソリュートビルドが右腕を一振りしただけで、あたりに強烈な衝撃波が飛び散り、それに当たったライダー達が最強フォームであるにも関わらず変身が強制解除された。

勝てない、そう思わせる絶対的強さが、ビルドから発せられており、何を思ったのか、ビルドは踵を返すとそのまま歩き去っていく。

第四話 「とりあえず現状報告」

アブソリユートビルドが現れてから数日後、ビルドにやられたライダー達は今現在人里にて休息を労わっていた。あの異常のような程の強さにやられたみんなの中には、気に失ったままの人もおり、かなりヤバイ状況だった。

そしてレミアは一番近くで現場を見ていたということもあり、先に博麗神社に向かっていった咲夜と合流を果たした。

〃〃博麗神社〃〃

「それで？そいつ……えっとアブソリユートビルドだったかしら？そいつはそんなに強いのか？」

腕を組みながら柱に背を預ける霊夢が心底信じられないと言った顔で聞く。霊夢は一度だけ士の旅に同行したことがあるから、おそらく仮面ライダーの強さを知っているのだろう。

そうでなければここまで信じられないって言った顔はしない。

「あら？私の話が信じられないかしら？」

「当たり前よ！何せ士さんは、あの八雲紫を圧倒したのよ？」

この意味がわかるでしょ？言葉の中にそんな意味を含んだセリフに、レミリアが顔を顰める。レミリアは見たことがないが、士がまだ世界の破壊者と呼ばれていた時に、一度この幻想郷を破壊しようとしたことがあったらしい。その際に異変解決組に紫も加わったらしいのだが、全滅し最終的に遥か未来の仮面ライダーであるオーマジオウを呼び寄せて倒したらしい。

それでいいのか幻想郷って頭を抱えたくなる事ではあるが、紫が異変解決の為だけに外の世界から誰かを連れてくるのは日常茶判事なので特に気にしない。

「でも、私があの時見た時はデイケイドはいなかったわ」

確かにあの場にデイケイドはいなかった。では一体どこへ？

レミリアの中でそんな疑問が溢れていた。デイケイドである士はとある都合上あまり幻想郷から離れることが出来ない。だからこそ幻想郷の危機に現れない事に疑問が生じた。

「でも、良かったではありませんか」

「なにがよ？」

突然口を開いた咲夜がレミリアを見て微笑む。それに対して頭にハテナを浮かべる霊夢。

「デイケイドを除いた九つのライダーが居たということは、お嬢様の最愛のあの方も居たのでしょうか？」

「そうね。居たわ。人里で彼らを見た時は驚いたけど」

咲夜の思いもよらぬ発言に霊夢がびっくり仰天したような顔をしているが、レミリアが平然としているのを見て一度心を落ち着かせる。

「人里で？何言ってるの？運ばれたのが人里なんだから当たり前でしょっ？」

「意味が違うわ霊夢。私が言っているのは昨日あんなことがあったのに、もう人里で出歩けるのを驚いたわ、という意味よ」

「……マジで言ってる？」

霊夢が驚いてレミリアを見るが、頷くだけで終わる。吸血鬼であるレミリアは基本的嘘はつかない。悪魔としての機能もあるが、優雅でカリスマのあるお嬢様のレミリアは嘘が好きではない。たまにジョークを言うことはある。

そしてどんな時も大抵は無関心で無愛想な霊夢は恋愛沙汰に耐性がなく、ちよつとの事でも興味（最近持ち始めた）が出てくるため、レミリアの『最愛のあの方』という単語に驚いたのだ。

「ま、まあ……みんな無事ならそれでいいか」

考える事を放棄してしまった霊夢であった。

くくスキマくく

八雲紫の使用するスキマの中で、青年が一人倒れていた。腰には白いバックルが装着されており、そのバックルから彼が仮面ライダーであることがわかる。

青年……門矢士は先程までこのスキマ内で紫と戦っていた。だが、戦って数分で倒されてしまった。

「ふふ。この程度なのかしら？…デイケイドの力というのは。随分と弱いよね」

「……クソ」

優雅に浮かぶ紫に対して悔しそうに顔を顰める士。

「いくら貴方デイクライドがこの世界の八雲紫私に勝ったことがあるからと言って、別世界の八雲紫私に勝てる道理などないでしょう？それは幾つ物の世界を旅した貴方デイクライドならわかるはずよね？」

そう言っただけ微笑む紫は、後ろから近づいてくる戦兔の存在を確認する。

「あら、早かったじゃない」

「……」

話しかけても反応のない戦兔を愛おしそうに見つめたあと、士の方に目を向ける。

その後何かを思いついたように戦兔の方に向き直す。

「ねえ、戦兔。このガラクタを地底に捨ててきてくれないかしら？」

「……………わかった」

物凄く間を開いて返事をする、倒されて動けない土を肩で背負い、スキマから出ていく。

「ふふ。とうとうデイエンドも動き出したようだし、私もウカウカしていられないわね。早くしないと『龍神の心臓』を盗られてしまうし……ふふ」

第四章・幻想郷と龍神

第一話「零夜正体／謎の少女」

地底で住むようになってから数日がたった。あのクス陰陽師からさとりを守ってから、随分とさとりの様子がおかしくなった。

俺と顔を合わせる度に真っ赤になったり、話しかけたら驚いて口ごもったり、一体なんだろうか？以前四天王力の鬼勇儀にこのことを話したら、「とうとうあの悟り妖怪姉にも春が来たかあ」なんて言っていたし、全然意味がわからん。

人間と共に生活してきた俺でも分からないことがあるとは……妖
怪は恐るべし生き物のようだな。

『さてと……今日は何しようかねえ。正直な所前世みたいなハチャメチャ生活なんてもうコリゴリだし、このまま平和に暮らせたらいもんだがなア……』

そう呟きながら俺はベッドに横になる。さとりが「エボルトさんは何もしなくていいですよ」なんて言うからすることもねえし、みんなも徹底して何もやらさしてくれねえし、たまにこいしが無茶振り言うぐらいだな。

今更だけどこいしの無茶振りって結構無理があるよな？なんだよ、フライパン六刀流って、どこの人外戦国侍だよ！いくらなんでもフライパン六刀流で料理は出来ねえわ！

こいしの無茶振りに対する愚痴言ったら眠くなってきた。少し眠るとするか。屋敷では何もしてないのにこいしのおかげで肉体と共に精神までもが疲れてくるわ。

くく精神世界くく

睡眠を取り始めて数秒で目が覚めた。だが、俺の目に映ったのは知ってる天井ではなく赤く染った空と蒼い月だった。

ここはどこだろうか？少なくとも俺はこのような世界は知らないし、来たことも無い。だとすると誰かに連れてこられたのか？いや、でも眠ってからまだ数秒しか経ってないし、こんな早業で連れてくるなんて紫ぐらい出来るやつ思いつかねえ。

「やあ、僕の予想してた通り来たみたいだね」

そんなことを考えていたら後ろから声をかけられた。振り返ってみれば俺が今憑依している人間……神崎零夜が立っていた。

『お前は……まさか零夜か？』

「うん。そうだね。僕は零夜。君が憑依している神崎零夜その人だ

よ」

零夜は見た目通りの年齢ではない。それは俺は零夜の体に憑依してからずっと疑問に思っていることだ。ある程度の記憶は何者かによつて封じられているものの、俺が見た記憶の中には初代博麗の巫女がいたり、妖怪の山で鬼達と喧嘩していたりと、年齢と時代が矛盾している存在だ。人間というのは長くても百年ぐらいしか体が持たない。それ以上は生きられずどんな人間も死ぬ。だと言うのに、こいつはもう数千年は生きている。

人間と呼ぶには些かおかしすぎる。こいつが俺みたいに人外系の存在ならまだしも、DNAは人間だ。そんな数千年も生きられるとは思えない。

『お前は本当に人間か？』

「あはは。やっぱり気づくよねーそこに」

零夜は心底面白そうに笑う。

「まあ、君の想像通り、僕は人間じゃないよ。DNAは人間だけど、中身はね」

『俺と同じように憑依しているのか？』

「いいや？・違うよ。僕は人間でもあり、妖怪でもあり、神でもあり、そして世界でもある。これはヒント。この世界で過ごすことになった君に対する大ヒントだよ」

人間でもあって妖怪でもあって神でもある？しかも世界でもあるって……なにその厨二病みたいな発言は。

「まあ、信じられないと思うし、深く考えなくてもいいよ。それと……一応このボトルを君に渡しておこうかな」

そうやって零夜が渡してきたのは三本のボトルだった。一つは五芒星の紋様がある紅白のボトル。もう一つは魔理沙の使う八卦炉のような形がついた黄色のボトル。最後は何も紋様のない白いボトルだった。

俺は三本のボトルを見てから零夜を見る。

「これは君にあげるよ。紅白と黄色のボトルはベストマッチするから。それと最後のボトルは、君が本当に何かを守りたいって思った時に使えるようになる。その時にエボルドライバーにライダーエボルボトルと共に使うといいよ」

『お、おいー！』

そう言っただけで振り返った零夜は歩き出す。徐々に姿が霧のように消えていく。

「僕の代わりに、この幻想郷のことは任せたよ」

この言葉を最後に、俺の視界が真っ黒になる。

くく地霊殿くく

『おい！待て！』

あの奇妙な夢から覚めて、叫びながら寝ていた体を起こす。すると、俺は腹になにか重たいのが乗っかっているのに気づく。

俺の腹の上にはこいしが乗っており、いきなり起き出した俺を見て驚いていた。

「ビツクリしたあ。急に起きないでよ。驚くじゃん」

『無茶言うなよ……それで、要件は？』

「お姉ちゃんがご飯だった」

それだけ言うと俺の前から突然消える。もう慣れてしまったが、こいしの能力である「無意識を操る程度の能力」で俺の認識からこいしが消えたからだろうか。

それにしても。

『幻想郷そのものが人間として生きていたとはなア』

夢の中で出会った零夜が最後に言ったあのセリフで、俺は零夜の正体に気づいた。恐らく幻想郷の管理者である紫も知らないと思う。

俺はいつの間にか手に握られていた白いボトルを見る。

『俺が本当に守りたい時に使う……かア』

そう呟いた途端、何故かさとの顔が浮かんだ。感情というものを知ってから初めての感覚だ。アイツの顔を思い浮かべると、少しだけ胸がズキンとする。

意味がわからない。俺は星狩り。消滅者だ。こんな愚たらない感情などいらぬ。そう思いたいのに出来ぬ。とても苦して辛い。これはなんなんだ？

『考えてもしょうがないよな』

思考を放棄した俺は取り敢えず飯を食うことにした。何事も飯を食べなければ始まらないからな。誰でもいいからうまいコーヒー作れるヤツいねえかな？

どうやら俺は死んでもコーヒー作りだけは無理なようだし。よくこれで喫茶店なんか開こうと思ったな前世の俺は。

くく
???
くく

全てが闇に包まれた薄暗い空間の中、一人の少女が豪華な椅子に座って眼を瞑っていた。

「自らの力を星狩りに託したか……全てを受け入れる幻想郷もこの異変は看過できないようだな」

僅かに目を開いた少女は立ち上がって大きく伸びをする。

腰まで伸びたサラサラとした白い髪に、血に染まったような真っ赤な瞳。男のロマンの詰まった大きな二つの山。百五十前後の身長でスラリとした脚。透き通るような白い肌。

少女は空間を操り、黒と赤の着物を取り出すと一瞬で着る。そして少し自分の姿を確認すると、満足げに頷く。

『うむ。今日も我は可愛い。では行くとするか……幻想郷最強の龍神として』

少女は……龍神は先ほどと同じように空間を操ると、紫と似たスキマを作る。そしてその中に消えていった。

第二話 「黒き禁忌の力」

夢の中で三本のボトルを渡されてから数日が経ち、地上で異変が起きている事を勇儀から聞いた。さとりは相変わらず顔を合してくれない。怒らせた訳では無いから、余計に原因がわからない。

誰かこのようなことに詳しいやつはいねえかね。

暇で暇で仕方ねえな。幻想郷で言うところの異変なんざ起こす気もねえから余計に暇に感じる。ってか、なんでもいいからなにかやらせてくれればいいのに……さとりは相変わらず「何もしなくていいです」なんて言うからよ。

少し、出掛けるか……。

『お前、なにやってんの？』

暇で仕方ない俺が外に出たら、玄関で土が倒れてた。なぜに？

『……仕方ねえな』

ここに倒れられていてもさとり達が困るだろうし、部屋に運んでおくか。土を背負って地霊殿に入ると、誰も使っていない部屋のベットで寝かせておく。もう一度外に出る時にお燐に遭遇したので、土を寝かせているのを伝えておく。こういうのは先に伝えておかないと面倒事になるからな（経験談）。

ホント、仮面ライダーってんのは世話がやける。

くく博麗神社くく

「ねえ、紫」

幻想郷の境界と呼ばれる場所博麗神社で、霊夢は誰もいない空間に向かって話しかける。普通なら一人でいる時に話しかけても誰も返事などしない。そう、普通なら。

「どうかしたのかしら？」

空間にスキマを開いて上半身だけ現れた紫。一見いつものように余裕そうな彼女が珍しく慌てたような様子だった。

その様子に気づかない霊夢ではないが、今は別にどうでもよかつ

た。

「私がもしあの力を使うって言ったらどうする？」

「霊夢、貴女まさか……!？」

酷く驚いた顔をする紫。霊夢の言いたいことがなんなのかわかったのだろう。

「あれは……あれだけは使ってはダメ！貴女の体が……」

「うん。分かってる。でも、私は博麗の巫女。この幻想郷を守るのが私の役目よ」

「それでもよ!!それでもあの力だけは!!」

「紫は優しいわね」

普段の霊夢を知ってるものが見れば信じられないぐらい優しい頬笑みを浮かべる霊夢は、驚きすぎて地面に降り立った紫を抱きしめる。

そして、小さく呟く。

「紫が幻想郷を愛してるように、私も幻想郷を愛してる。誰かわからないヤツらにこれ以上荒らされるのはもうコリゴリなの」

「霊夢……」

抱きしめられた紫は呆然として何も言えなくなる。紫から離れた霊夢は浮かび上がると、この異変を気に今もなお人里を襲っている妖怪に向かって高速で飛ぶ。

一人残された紫は去っていった霊夢を眺めるが、はっと気を取り直してスキマの中に入っていく。

く博麗霊夢く

私は幻想郷を守る博麗の巫女。幻想郷を守るためなら命をかけるければならない。初代博麗の巫女は幻想郷のために命を落とした。私はその生まれ変わって言われている。その証拠として初代博麗の巫女が作り、本人しか使えない奥義が使える。

でもこの技は諸刃の剣と言っても過言ではない。一度使えばどこまでも命を蝕んでいくから。それで初代は命を落としたんだし。でも、そんなの今更。私は死を恐れない。博麗の巫女が死如きを恐れたら幻想郷を守ることなんか出来ないから。

「博麗の巫女奥義【桜華月黒牙】……」

私の周りを闇が包んでいく。少しずつ体を蝕むのが自分でもわかる。その痛みに少しだけ顔を顰めてしまう。

でも耐えなければならぬ。私は博麗の巫女だから。

く霧雨魔理沙く

私は今人里に居る。異変が起こっていい気になってる妖怪達が、人間を襲うのを防ぐために。

「クソ！いくらなんでも多すぎだろうが！」

妖怪の大群に向かってマスターズパークを撃つ。撃つ撃つ撃つ撃つ。どれだけ撃つても数が無くならない。妹紅も慧音も子供達を守るために戦ってるから、私が今倒される訳には行かない。

「魔理沙！」

そんな時、私にとって救いとなる声が聞こえた。

「霊夢！来てくれ……た、か？」

嬉しさのあまり霊夢の方を振り返った私は、霊夢の姿を見て驚いてしまった。

それはだって、もう使わないことを誓ったはずの姿だったから。通常の巫女服とは違う。黒と赤の巫女服。白く染った髪。遠くにも感じる深い闇の力。

初代博麗の巫女の最終奥義【桜華月黒牙】を使用した霊夢。通称黒霊夢。

「霊夢っ!!それはもう、使わないはずだろ!!」

私は思わず怒鳴り込む。

だってそれは、ホントに使っちゃダメなやつだから。

く博麗霊夢く

初代博麗の巫女でさえも命を落とす技【桜華月黒牙】。今の私の実力じゃ持つて数分が限度。仮面ライダー達が人里を守ってくれているうちに全て終わらせる!!

「黒符【夢想封印・絶】!!」

いつもの夢想封印は色とりどりのカラフルな弾幕なのに、黒化している私の弾幕は赤黒い闇そのもの。

身も心も闇に染まらないうちに、妖怪達を片付けないとね。

そんなことを考えていたら魔理沙の所で紅い火柱が昇る。一瞬だけ驚いた私だが、直ぐに落ち着きを取り戻す。

だってそれは……

「霊夢、お前がもしまた闇に落ちそうになれば、すぐに止めてやるよ」

真っ赤な魔女の衣装に身を包んだ魔理沙がいるから。

かつて起きたロストワード異変で別世界の幻想郷に行った時に出

会った紅夢の魔女霧雨魔理沙の力を受け継いだ魔理沙。その力は誓いの印であり、彼女の本気を表す。

魔理沙は本気で私を止めてくれる。なら遠慮入らないわね。

「闇に堕ちる前に、全て終わらすわ！」

「へっ！やっぱ霊夢はそうでなくっちゃな!!赤偏【アルタースパーク】!!」

妖怪に向かってミニ八卦炉を構え灼熱の炎を噴射する。それはまるで魔理沙の十八番マスタースパークのようなレーザーに見えた。

たったその一撃で一直線に妖怪達の群れがなくなった。私も負けてられないよね？

桜華【夢想封印・無月】

夢想封印に闇を纏わせた弾幕が妖怪達に炸裂する。この桜華を使用しているとき限定の技は、私自身が闇になってるからこそ出来る。

まあ、長くは持たないけどね。

「次に行くわよ魔理……沙……」

このまま行けば勝てる。そう信じていた。

ドクン!!

無意識のうちに気にしないようにしていた。だけど、だんだんと闇が侵食してきているから意識が……

「霊夢？おい霊夢!!」

さすがに耐えきれなくなってしまつてその場で倒れてしまう。すぐに駆け寄ってきた魔理沙がなにか叫んでいるみたいだけど、何も聞こえない。

あーこれは少し困ったことになったわね……。

第三話 「久しぶりの地上と紫の心」

久しぶりの地上に出てきた。後ろにこいしがついてきているのが何となくわかる。なんかもう、何回も何回も付き纏われて気配がわかるようになったわ。

さて、人里にでも行くかねえ。

『ん?』

人里に向かうおうと向けば、黒く染った巫女の霊夢が倒れており、その霊夢を起こそうとする真つ赤な魔女服を着た魔理沙がいた。なんか涙目になってる。巫女服からは黒い瘴気のようなのが漏れ出ているし。

それに、魔理沙は倒れている霊夢に意識がいつてるからか、妖怪が近づいているのに気づいていない。あのままではやられてしまうだろうな。

だが、俺には関係ない。そう、関係ないんだ。

「コブラ！ライダーシステム！エボリューション！」

関係ないはずなのに仮面ライダーエボルに変身して走り出していた。魔理沙の背中を狙う妖怪に向かって勢いよく蹴りを放つ。ホント、感情を持つようになってから驚くことばかりだぜ。死んだら絶対に戦兔を恨んでやる！

「お前は……仮面ライダーエボル！どうしてここに!？」

突然底うように現れた俺に、魔理沙が驚いたように聞いてくるが無視。そのまま妖怪を殴って蹴ってを繰り返していく。霊夢の今の状態がどうなってるか気にならないといえは嘘になるが、今はそれはどうでもいい。こいつらを片付けてからでもどうにかなるはずだ。

『ふん。黒巫女の状態はおそらく身体を蝕むのだろうか？ここは俺がどうにかしてやる。早くそいつを連れてけ！』

「……わかった。言いたくないけど今は礼を言うぜ」

俺が妖怪共を引き付けているうちに魔理沙が霊夢を背負ってどこかに向かう。さとり聞いた話の中に病院代わりとして永遠亭という所があるらしいから、恐らくはそこに向かったんだろうな。

『はあ………ったくよオ、流石にコブラだけじゃ持たねえぞこりやあ。ラビットあるけどドラゴンねえとどうにもならねえしなア………』

今だけでもいいから万丈がいて欲しいと心から思ってしまった俺。感情というのはやはり面倒くせえなおい。

まあいい。全部滅ぼせば済む話だ。

簡単な話だろう？

【エボルテックファイニッシュ！チャオ〜】

何故かに列に並んでる妖怪共に向かつて飛び蹴りをくらわしてやる。すると妖怪共は瞬く間に消えていった。まるで最初からその場になかったかのように。

俺は変身を解かずに、自分の周りを警戒する。もしかしたら油断している所を襲ってくる可能性があるかもしれないからだ。

まあ、この世界で俺の予想を遥かに超えるようなことをしでかすのは、スキマ妖怪の八雲紫と仮面ライダー共だけだ。あ、あと博麗の巫女だな。

あの巫女ばかりは流石の俺でも予想出来ない行動を取りやがるかなア。今回は何故か意識を失っていたようだが、まア死にはしないだろうよ。

そんな簡単にへばってしまうのであれば博麗の巫女なんざやっているわけがないからな。さとり聞いたところによると、代々博麗の巫女は一族による継承と紫が連れてきた外の世界の少女が背負うのと、二種類の方法があるらしい。詳しい事は初代の頃から生きている幻想郷神崎零夜と幻想郷の管理者八雲紫しか知らないらしい。

そんな博麗の巫女にだけ許され、そして禁忌の技と呼ばれる奥義【夜桜月黒牙】は、博麗の巫女の中でも初代と霊夢にだけ使用が可能となっている。初代と霊夢以外の巫女は使用しただけで体がその禁忌の力に耐えきれず崩壊してしまうからだ。

だからこそ博麗の巫女最後の技なのだ。なにせこの奥義を創った本人ですら使用を禁じたぐらいの危険な技。だが、博麗の巫女を名乗るのであれば一度ぐらい使用出来なければならぬ。今までの博麗の巫女も奥義として技があるという情報を知っているだけで、最終的な死を除けば、みんなこの禁忌の力を使っていない。

ここからは俺の勝手な推測だが、奥義【夜桜月黒牙】は先程俺が見た霊夢のあの状態を指すのではないか、そう考えた。膨大な霊力と力を得ることが出来る代わりに命を徐々に削っていく。その力に耐えきれたものだけが、その奥義を使うことを許されるのではないか？

だが、一度使えば待っているのは寿命による死ではなく、禁忌の力を使った代償としての呪いの死だ。ならそう易々と紫が使わせるわけがない。そんなの俺でも止める。この俺がそう思うぐらいの強大な力を宿すのだ。

俺の世界にいた桐生戦兎は、大切な友を止めるために、記憶の中にいる葛城巧が残した悪魔のカハザードトリガーを使用した。それにより、代償として膨大な負荷がかかってしまい何度も暴走を犯した。そして戦兎は自らの手で殺す気になかった敵を、友を止めるためだけに使った禁忌の力で殺してしまった。

まア、何が言いてエんだって思うだろうけどよ。要するに、だ。それほどまでに強大な力には必ずしも代償があり、その代償しだいでは償いきれない罪を背負うことになる。その覚悟を霊夢が持っているのかどうかは知らねエが、生半可な覚悟で奥義を使えば必ず死ぬぞ。

くく八雲紫くく

私が開いているスキマの向こうでは、仮面ライダーエボルに変身し

た神崎零夜エボルトが戦っている。霊夢が奥義【夜桜月黒牙】通称黒化に耐えきれなくて倒れてしまった時、一番近くにいた魔理沙が介抱してくれたけど、それを見逃すような妖怪ではなくすぐに攻めてきた時にはかなり焦った。

思わず私自信がスキマから出て助けに行きたかったぐらいだ。だがそれよりも早く仮面ライダーエボルが助けに入った。

それはそれでかなり焦った。いや、驚いたと言うべきか。今まで私たちの前に現れたエボル（と言ってもそこまで出てきてない）は、まるで悪魔のような強さを秘めていて、その心からは邪悪さを醸し出していたから。

「エボルト……貴方は一体何者なのかしら？」

私しかないこの空間内で、そんな小さな疑問の眩きが漏れた。